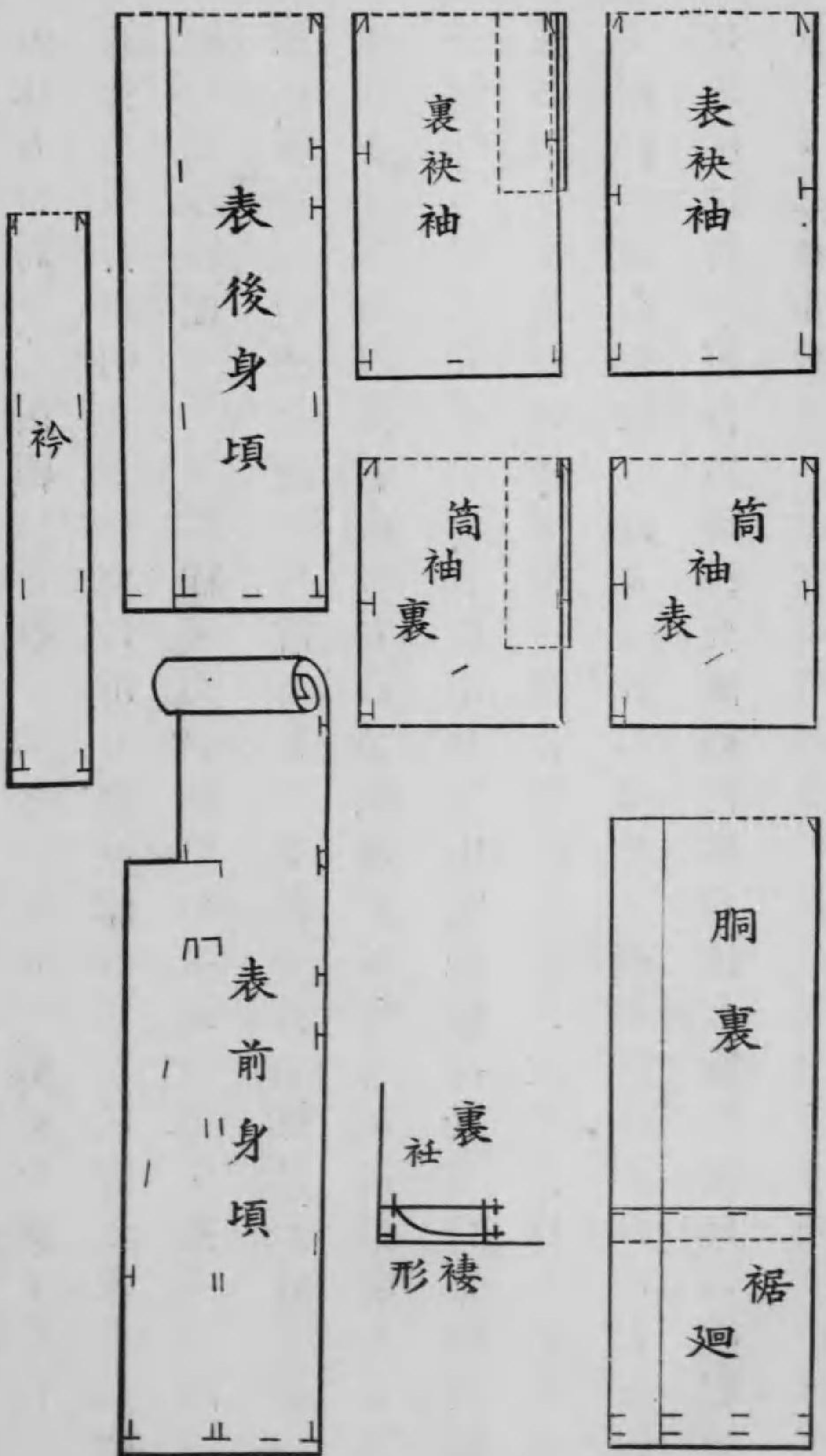


より平躰又は隠し躰をかけ、表を中に二つに折り、山標をなし、次



ぎに衿丈(衿肩明・衿下り)衿附を加へたるもの(の)標及び衿幅の標を附くべし。

三 縫ひ方順序

- 一 表裏の袖
- 二 表身頃及び衿
- 三 裏身頃及び衿
- 四 丈調べ
- 五 裾合せ
- 六 春脇の縦綴及び身八つ口
- 七 袖附
- 八 衿の縦綴及び衿下縫
- 九 衿附並に衿紵
- 一〇 横綴

1 袖 三つ身衿の時の如く、先づ裏袖に袖口切をかけ、漸次袖下八つ口と縫ひ、兩袖を作りて廻りに平躰を掛け、正しく疊み置くべし。

2 表裏の身頃及び衿 先づ表身頃を取りて衿肩明をかがり、背脇及び衿を縫ひて折を付け、次に裏身頃も表身頃の如く衿肩明をかがり、背脇及び衿を縫ひ、但し脇縫は裾口にて幅五六厘

つめて縫ふべし)表裏身頃の裏を出し、袖疊みにして裏身頃を下に、表身頃を上にして板上に置き、待針にて留め能く丈調へをなし、脇の縫込を開きて割り躰をかけ、表裏の脊脇及び衿の縫目に、上下一二寸の間平躰を掛け置くべし。

3 裾合せ 表裏の裾口を合せ、裏の方を稍張り目にし、各縫目を合せて待針を打ち、表を見て四裾を合せ、各縫目毎に返し縫をなし、裏を見て、左右の襷をあげ、衿幅は隠し躰をなし、他は四裾とも一分の着せをかけ、表裏合せて衿の寸法通り出し、表裏ともに平躰をかくべし。

4 脊脇の縦綴及び身八つ口 表裏の脊縫を合せて待針をなし、表を見て六七分の針目にて衿肩より裾口まで綴ち、次ぎに兩脇は脇明より一二寸下りたる處より裾口まで綴ち付け、脇明の處表裏の前身頃にて、表裏の後身頃を挟み四つ留をなし、其の絲にて袖附標まで前の八つ口を縫ひ、次ぎに後の身頃八つ口も袖附まで縫ひ、表へ返して並の着せにて表裏ともにして平躰をかくべし。

5 袖附 表身頃の山標と袖山とを合せて待針をなし、袖附の標を合せて、袖の方稍弛めに、内外共に四つ留をなし、表袖の方より付け、始めの二針三針は返し縫となし、山標の前後を細かき針に縫ひ、付け終りも二三針返し縫をなすべし。次ぎに裏袖を表と同じ様に縫ひ付け、表裏とも縫目を袖の方に返し縫ひ込みを斜に開きて表裏共に平躰をかくべし。

6 衿の縦綴及び衿下縫 表裏衿附の縫ひ目を合せて、劔先より四五寸下りたる處まで裾口より縦綴をなし、次ぎに衿の幅標

を合せて折を付け、襷先を拵へ、表裏の衽幅を合せて待針をなし、衽下標の處まで縫ひ、表の方へ折をつけ、表を返して平襷をかくべし。

7 衽附並に衽拵 表裏の衽附を合せて襷絲にてあらく綴ち置き、衽の山標と脊縫の山とを合せて待針をなし、尙ほ衽肩廻・劍先・合襷及び其の間にも待針をなして釣合を檢へ、衽肩廻しより劍先までは衽の方を稍弛めになし、下前より附け始め、衽肩廻し及び劍先二三寸の間は小針が一針抜きに縫ひ始め、終りは抄ひ留にして一二寸返し置き、衽の方に折をつけ、次に幅標を合せて衽先を縫ひ、衽先留をなしたる一分先き一分の着せにて裏の方に返し、表を出して左右共正しく形を整へ、幅標の通り全體に折を付け、三つ衽切を入れ、幅を折りて脊縫・衽肩廻し・劍先・衽先

及び其の中間に待針をなし、衽のねぢれぬ様注意して下前より小針に拵け行くべし。

8 横綴 表を見て裾口を向ふにして持ち、上前の衽附の處にて裾の折目より一分五厘程上りたる處に小さく針を出し、返し針にて裏にも出し、次に前幅全體にて表に五針裏に二針出し、脇縫目も衽附の時と同じく更に表裏に出し、それより後幅は表に七針、裏に三針出して綴ち、脊の縫目の處は亦表裏に出し、順次此の如くして下前をも綴ち行くべし。此の際裏變り色なるときは、最初表に隠し襷をかけ置き、綴ち絲は表布に出さずして裾の縫代のみを抄ふを可とす。

次に掛衽をかくべし。其の仕方は單衣の時に同じ。

右終らば丈幅を檢へ、絲標・絲屑等を取りはらひて裏を出し、各

縫目及び袖口・八つ口・劔先等の肝要なる部分に烙鋏をかけ、次に表を出して裏の時と同じく、肝要なる部分及び全體を烙鋏をかけ丁寧に疊みておしをなすべし。

【設問】

四つ身裕の普通仕立上げ寸法を述べよ。

裾廻し附四つ身裕の標付け方を問ふ。

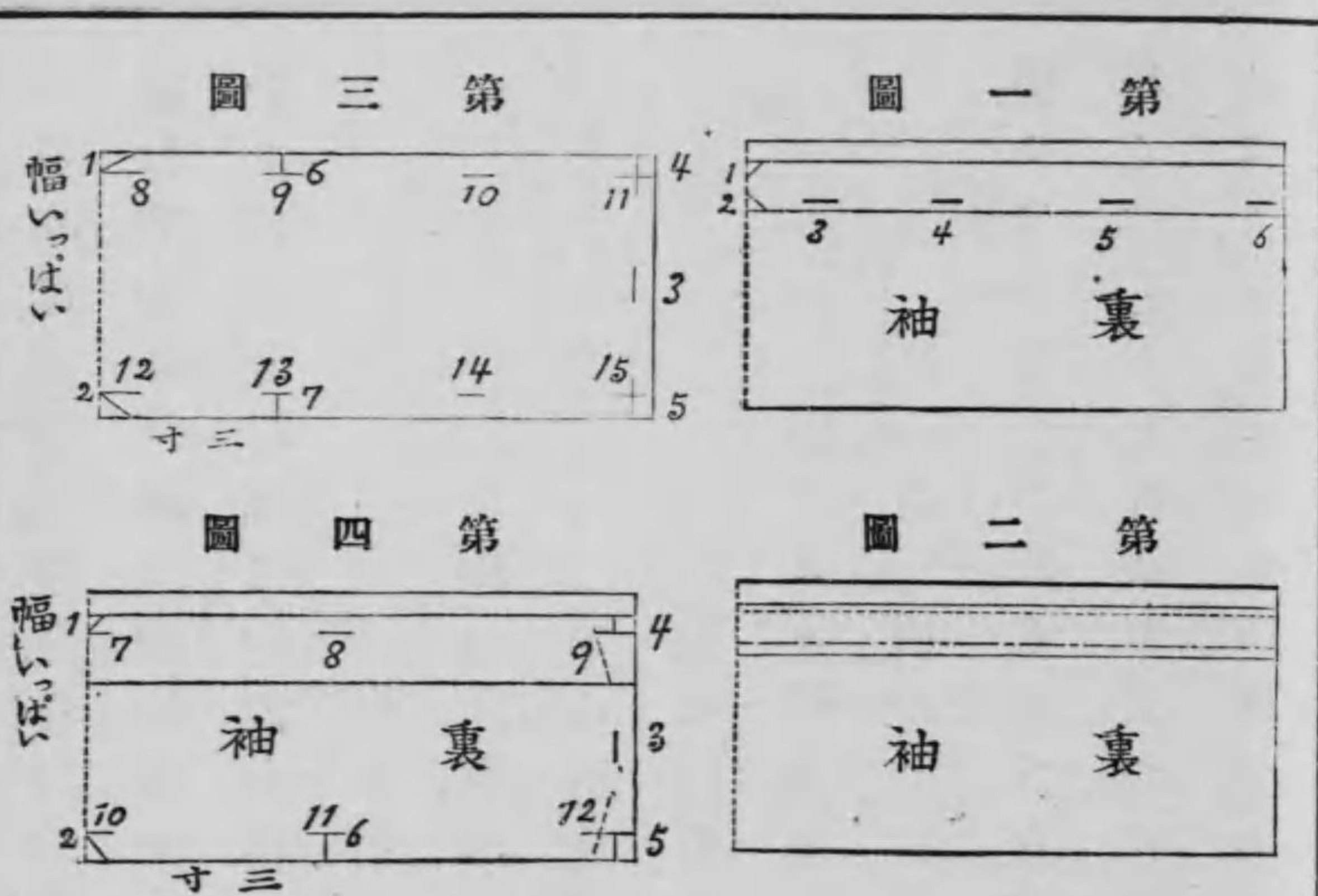
四つ身裕の縫ひ方順序を述べよ。

第十二章 一つ身綿入

第一部分縫

一 潤袖縫ひ方

標付け方 半幅二尺三寸の部分縫用布二枚と、四つ割一尺八寸の布一枚とを取り表裏の袖及び袖口ぎれと看做して標すべし。



其の仕方は、先づ裏袖は表を、袖口ぎれは表を中にして各二つに折り、袖口ぎれを一分ひきて裏袖の上に重ね、山及び縫代の標をつけ、それより標の通りに袖口をかけ、並のきせにて第二圖の如く平襷及び縫ひ襷をなし、次に表裏共に表を中にして各二つに折り、第三圖及び第四圖の如く山・丈・附幅の標をつくべし。

但し裏袖は表袖より丈五厘口明一分五厘八つ口一分をつ

め、幅は衽の二倍(凡そ三分)を廣くなしおくべし。

縫ひ方 先づ表裏共に袖下を縫ひ、内袖の方に折り返して平縫をかけ、次に袖口に含み綿をなす。綿の含め方は、一寸幅のもの一枚、六七分幅のもの一枚若しくは二枚(厚き綿は一枚、薄き綿は二枚)を其の上に重ね、これを二つに折りて稍弛めにして袖口ぎれの中に入れて、第五圖の如く、袖下の縫ひ目の處にて衽の山より四分程内を五六分づゝの針目にて、表へは一針おきに小さく出して綴ち行き、山の處は中央より一分づつはなして左右に出し、順次前の如くにして含め行くべし。それより八つ口の方に七八分幅の綿一枚を二つに折りて入れ、幅の折り角より三分程下りて一寸位の針目にて綴

第五圖



ちおくべし。

右終らば、表と合せて能く釣合を見、處々に待針をなし、袖下の縫ひ目の處より針を出して三四分の針目にて五厘程内を縫け行き、終りは少しく紵け重ねて打ちどめをなすべし。後、八つ口を表裏合せ、袖下にて表を稍多く弛めて、袖口の時の如く紵け行くべし。

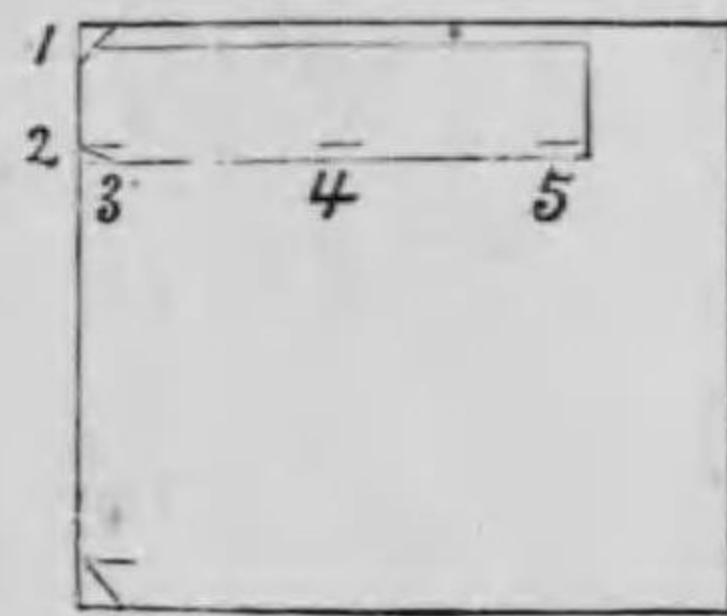
注意 木綿わたを切るには鉄を用ひずして、左手にて綿を壓へ、所用の寸法をはかりて、右手にてむしり切るべし。

二 筒袖縫ひ方

標付け方 三つ身袷筒袖の部分縫に用ひたる半幅一尺二寸の用布二枚と、外に四つ割幅九寸の袖口用布一枚とを取りて、第一

圖の如く、袖口掛の標をなして縫ひ、次に第二圖、第三圖の如く

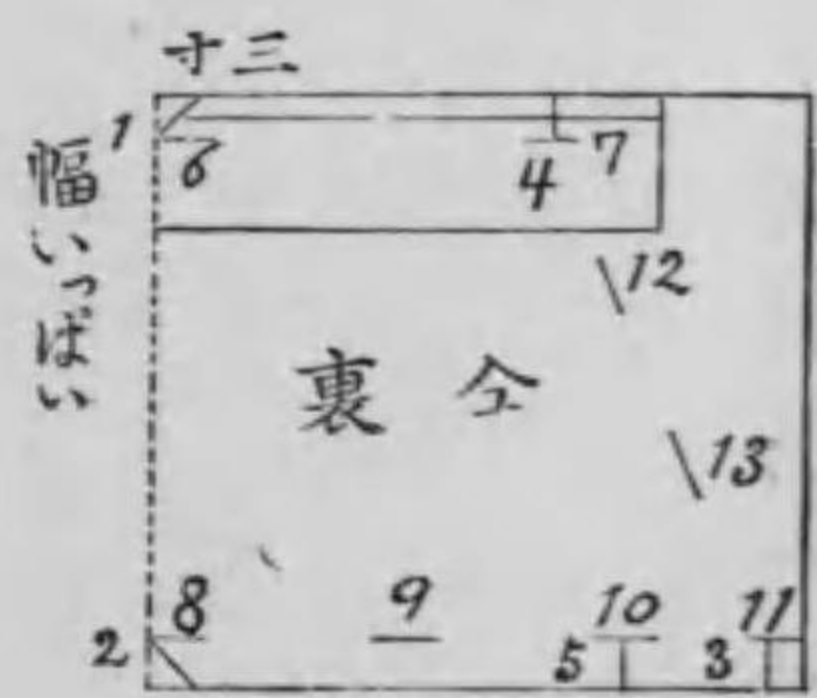
第一圖



第二圖



第三圖



表裏袖に、山・丈・口・明・附・幅・袖下の標をつくべし。

但し裏袖口は表より二分をつめ、丈は一分をつむ、又幅は潤袖の時と同じく襷の二倍廣くすべし。

縫ひ方 表裏袖の袖下を縫ひ、内袖の方に折り返し、縫ひ込みは二分のきせにて割り躰をかけて左右に開き、袖口及び八つ口に潤袖の時の如く含み綿をなし、袖口下のところは二度針をかけて強く留め、後三四分の針目にて衿け行き、次に八つ口を衿けつくべし。

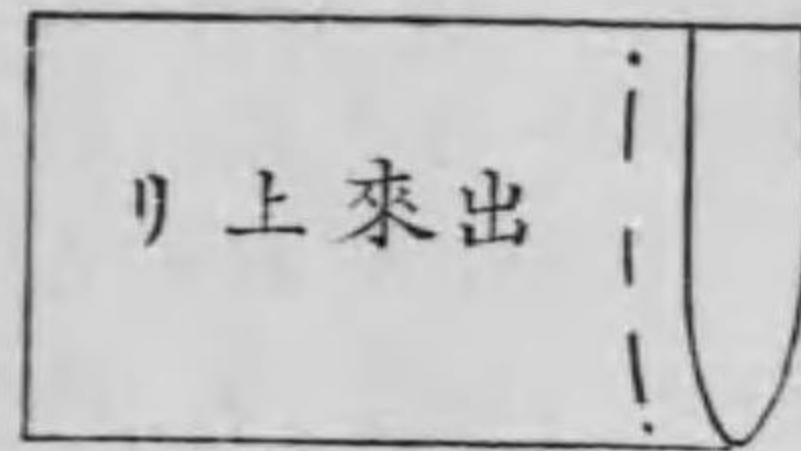
三 裓縫ひ方

二尺五寸の運針用布を用ひて、衿裓部分縫の時と同じく縦を空縫になし、手前の方に折りをつけ、更に横に二つに折りて、表裏の衿と看做すべし。

標附け方 三つ身衿の時の如く、襷の二倍(六分)出して表と合せ、幅及び表裾の縫代を標し、次に裏に裓形をあて、裓の標をつくべし。

縫ひ方 衿裓の時と同じく、先づ裏の裓形の標に倣ひて躰縫にて縫ひおき、角を引きて皺を消し、表と合せて縫ひ、一分のきせに

て表の方に返し、襷先は五厘隠し、襷をなし、後、綿を入れ、小襷を作りて圖の如く表よりあらく、襷をなし、裏の縦襷にも一枚綿を含めて、襷をかけ、三四分の針目にて、拵け上ぐべし。



但し、襷綿の寸法は、二寸幅一枚、一寸二三分幅一枚、一寸幅一枚を重ねて二つに折り、又、薄き綿ならば、尚ほ一寸五分幅程のもの一枚を入れる、を可とす。

注意 表の襷先に切り下げあるものは、先づ形を當て、切り下げの標をなし、後裏を合せて標すべし。

【設問】

潤袖口の綿の拵へ方及び含め方を述べよ。

筒袖の表裏の寸法の相違を問ふ。

四分の襷に於ける襷形標の附け方を述べよ。

第二 一つ身綿入裁ち方・積り方

一 潤袖裁ち方

表用布 一つ身單衣潤袖に同じ。(本書六二頁参照)
裏用布 並幅長さ一丈一寸二分

表用布の總丈に襷の四倍を加へたるもの。

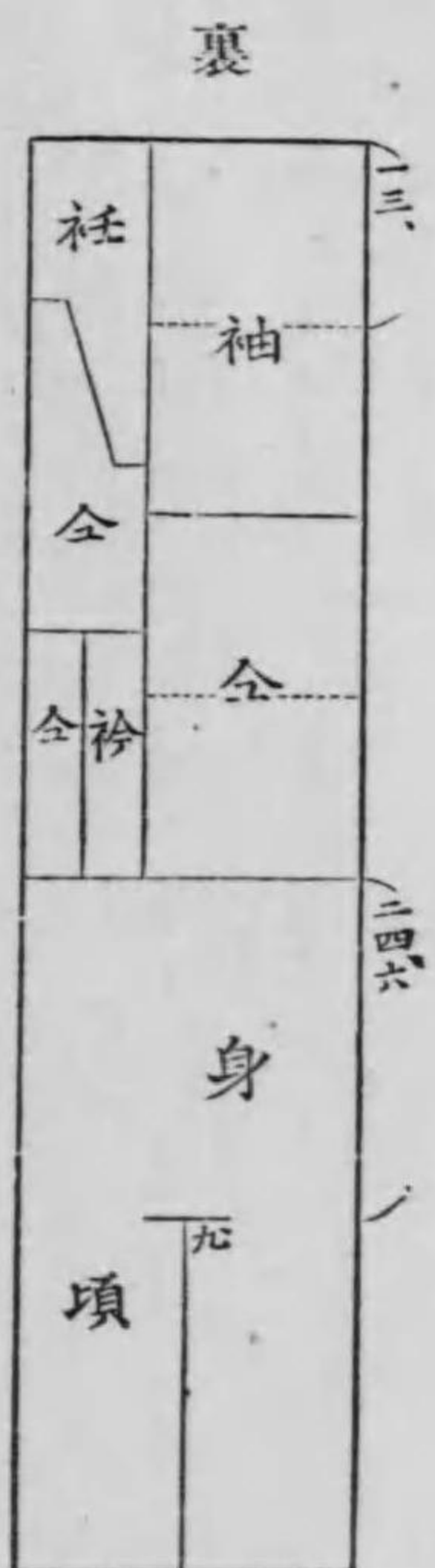
普通裁ち切り寸法裏

袖丈	一尺三寸	袖幅	五寸二分	身丈	二尺四寸六分
衿肩明	九分	衿丈	二尺三寸一分	衿下	七寸九分
衿幅	三寸八分	衿丈	二尺一寸 <small>片身頃</small>	衿幅	一寸九分

注意 裏の衿幅を表より廣くしたるは、衿下の丈が表より短きと、綿を含むに便利なるによる。又裏袖幅は表袖幅より五六分程廣きを要するが故に、仕立方の際には、狭き分だけ袖口下に持ち出し、ぎれをつくるものとす。

一つ身は多くは通し裏となすものなれども、若し裾廻しをつくるときは、凡そ一尺程の高さとなすべし。

裁ち方の圖



積り方

$$13 \times 4 + 24.6 \times 2 = 101.2^{\text{寸}} \dots \dots \dots \text{總丈}$$

$$(101.2 - 13 \times 4) \div 2 = 24.6^{\text{寸}} \dots \dots \dots \text{身丈}$$

$$(101.2 - 24.6 \times 2) \div 4 = 13^{\text{寸}} \dots \dots \dots \text{袖丈}$$

之を公式にて示せば左の如し。

$$\text{總丈} = \text{袖丈} \times 4 + \text{身丈} \times 2$$

$$\text{身丈} = (\text{總丈} - \text{袖丈} \times 4) \div 2$$

$$\text{袖丈} = (\text{總丈} - \text{身丈} \times 2) \div 4$$

二 筒袖裁ち方

表用布 一つ身單衣筒袖に同じ。(本書六五頁参照)

裏用布 並幅長さ九尺四寸八分

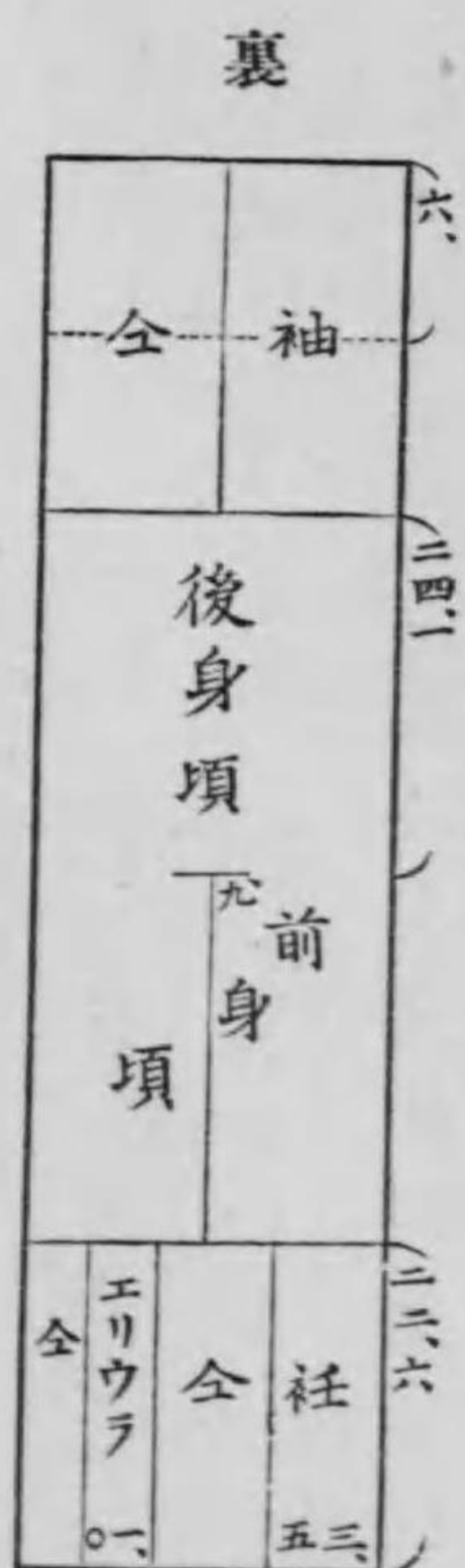
表用布の總丈に衽の五倍を加へたるもの。

普通裁ち切り寸法裏

袖丈	六寸	袖幅	七寸五分	身丈	二尺四寸一分
衿肩明	九分	衽丈	二尺二寸六分	衽幅	三寸七分餘
衿丈	四尺一寸	衿幅	一寸五分		

すべて表の裁ち方に同じく、只身頃及び衽に於て衽の二倍を長くしておくのみなり。

裁ち方の圖



但し裏丈少なきときは、上圖の如く袖幅を半幅となし、袖口下に廣き持ち出しぎれをつくるも可なり。又表の布幅廣くして裏衿を要せざるものは、上圖の衿を半幅となすべし。

積り方

$$6 \times 2 + (24.1 \times 3 - 1.5) = 82.8^+$$

.....總丈

$$\{(82.8 - 6 \times 2) + 1.5\} + 3 = 24.1^+$$

.....身丈

$$\{82.8 - (24.1 \times 3 - 1.5)\} + 2 = 6^+$$

.....袖丈

之を公式にて示せば左の如し。

$$\text{總丈} = \text{袖丈} \times 2 + (\text{身丈} \times 3 - \text{衿下} \text{ 〇})$$

$$\text{身丈} = \{(\text{總丈} - \text{袖丈} \times 2) + \text{衿下} \text{ 〇}\} + 3$$

$$\text{袖丈} = \{(\text{總丈} - (\text{身丈} \times 3 - \text{衿下} \text{ 〇}))\} + 2$$

注意 普通の裁ち方に於ける積り方は、前記の裁ち切り寸法により、一つ身單衣積り方の公式によりてすべし。

【設問】

- 一つ身綿入潤袖の裁ち方につき、表と裏との異なる箇所を述べよ。
- 一つ身綿入筒袖表の裁ち方を圖解せよ。
- 又其の積り方の公式は如何。

第三 一つ身綿入仕立方

一 普通仕立上げ寸法

潤袖・筒袖共に、一つ身單衣の仕立上げ寸法に同じ。(本書六七頁参照)

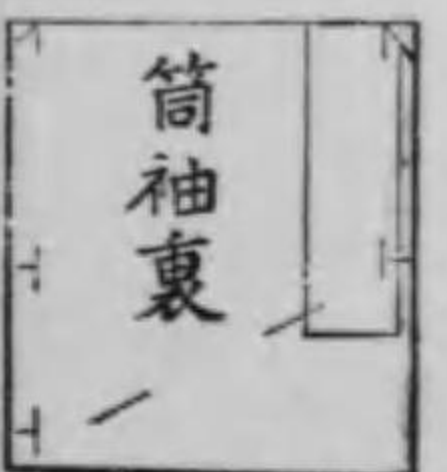
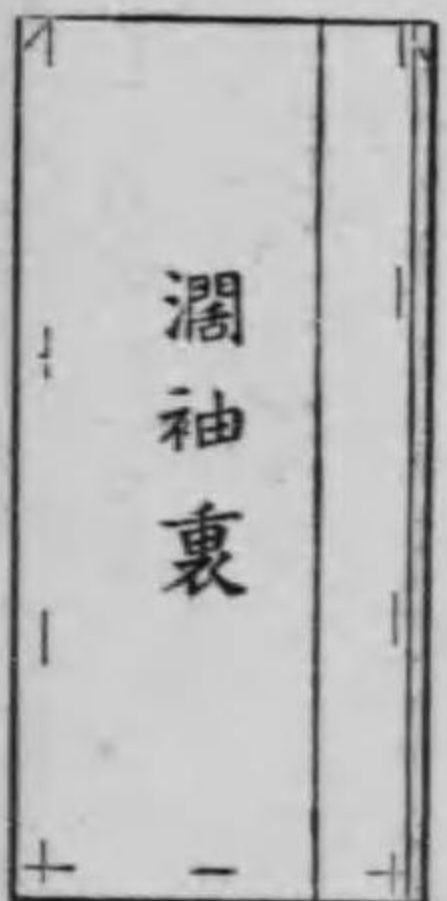
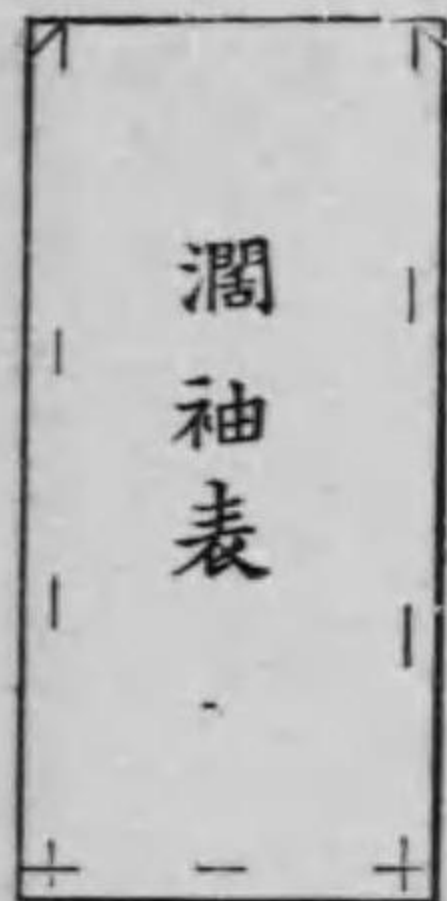
但し袖口衽は一分五厘、裾衽三分とす。

二 標付け方

- 一 袖口掛
- 二 表袖
- 三 裏袖
- 四 表後身頃
- 五 表前身頃
- 六 裏後身頃
- 七 裏前身頃
- 八 表裏の衽
- 九 衽

1 袖 潤袖筒袖共に、先づ袖口をかけ、次ぎに寸法通り部分縫の時と同じ仕方にて、表裏に標をつくべし。

2 表裏身頃及び衽衿 前に示せる順序により、三つ身衿の時と同じ仕方にて標すべし。



表後身頃

表前身頃

衽

表衽

裏衽

衽

注意 裏身頃の標附は前後とも只衽の二倍を長くするのみなるを以て此處に省く。

三 縫ひ方順序

- 一 表袖
- 二 裏袖
- 三 表身頃及び衽
- 四 裏身頃及び衽
- 五 丈調べ
- 六 衽附
- 七 表裏袖附
- 八 裾合せ
- 九 袖口及び八つ口の含み綿
- 一〇 綿入れ
- 一一 裾の假綴
- 一二 袖口衽
- 一三 八つ口衽
- 一四 衽下衽
- 一五 衽綴及び衽衽

一六 縦綴

一七 横綴

一八 掛衿

1 袖 部分縫の時の如く、先づ左右の表袖を縫ひ、袖下及び袖口に平襷をなし、次に裏袖の左右を縫ひて袖下に襷をかくべし。

2 身頃及び衿 先づ表身頃の兩脇を縫ひ、衿の時と同じく上下共に二三寸返し針をなして、前身の方に折りをつけ、次に標の通り左右の衿をつけ、劔先のところは斜に、下は縫ひ目に沿ふて一二寸程返し針をなし、衿の方に折りをつくべし。

次に同じ仕方にて裏の兩脇を縫ひ、衿をつけ、表裏共に裏を返して袖疊みとなし、三つ身衿の時と同じく、裏を下に、表を上置き、丈調へをなし、表裏共に兩脇及び衿に平襷をかくべし。

3 衿附及び表裏袖附 單衣の時の如く、表身頃に衿をつけ、平襷をかけ、次に表裏の袖をつけ、始め終りを返し留になし、表は袖の方に、裏は身頃の方に折り返して平襷をかくべし。

4 裾合せ 丈標の通り表裏に折りをつけ、各縫ひ目を合せて裏を稍張り目に待針をなし、表を見て四裾を縫ひ、縫ひ目毎に返し針をなし、次に裏を見て左右の裾をあげ、一分のきせにて折りをつけ、(襷先は五厘)衿には隠し襷、四裾及び表の衿下には平襷をなしおくべし。

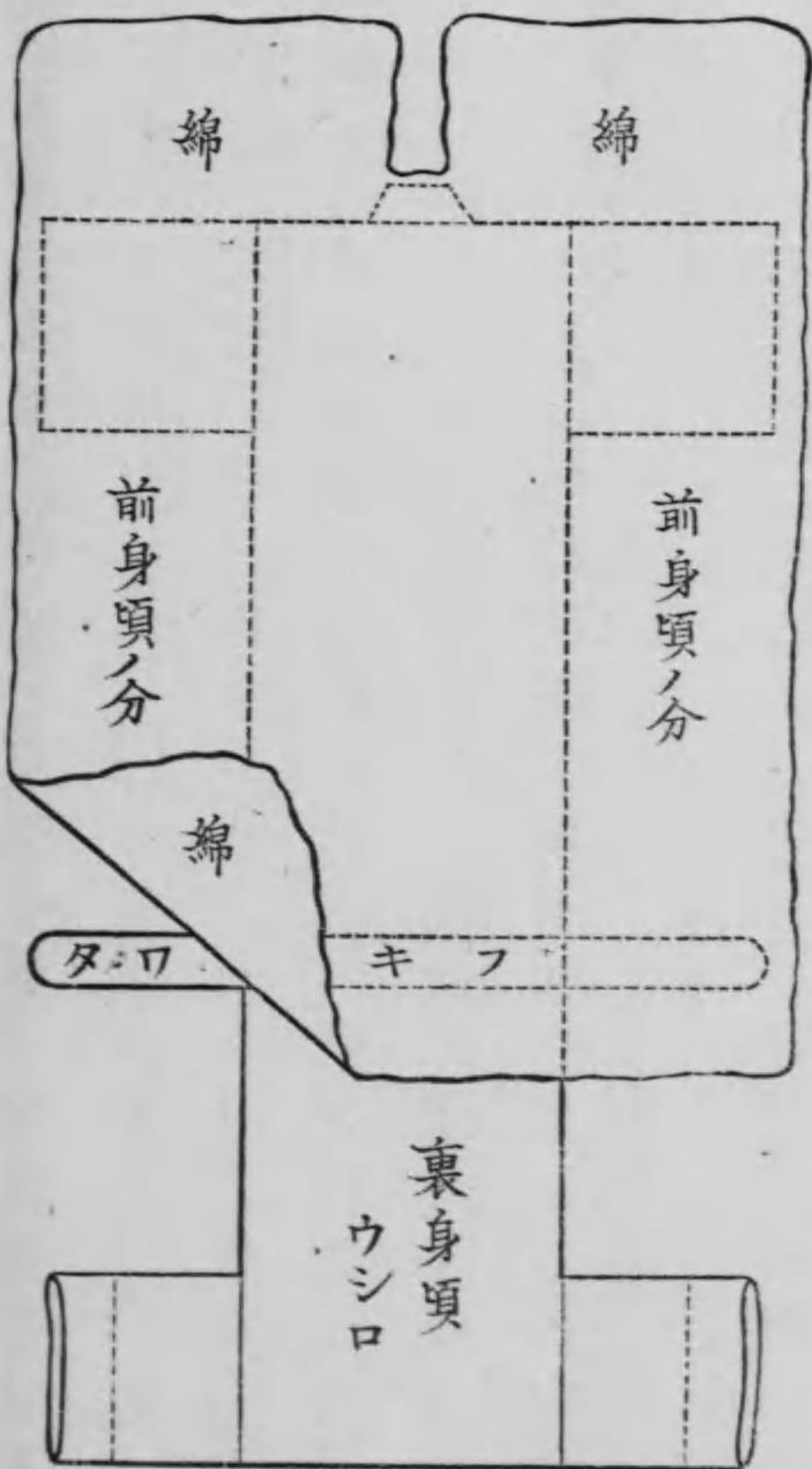
注意 裾廻しの色、表の地色と異なるものは、衿の時の如く、四裾にも襷と同じく隠し襷をなしおくべし。

5 含み綿及び綿入れ 部分縫の時の如く、左右の袖口・八つ口に綿を含み、(袖八つ身八つ共に)裏を出して夜着疊みとなしおき、襷綿を作るべし、襷綿は部分縫の時と同じく、並みの厚さ(一枚の

目方十三四匁の綿ならば二寸幅・一寸二三分幅・一寸幅の三枚を重ねて二つに折り、丈は裾口の全體の幅を合せたるものより二三寸長くなしおくべし。

のち、表の後身頃及び左右の袖をひろげ、濶袖ならば袖附より

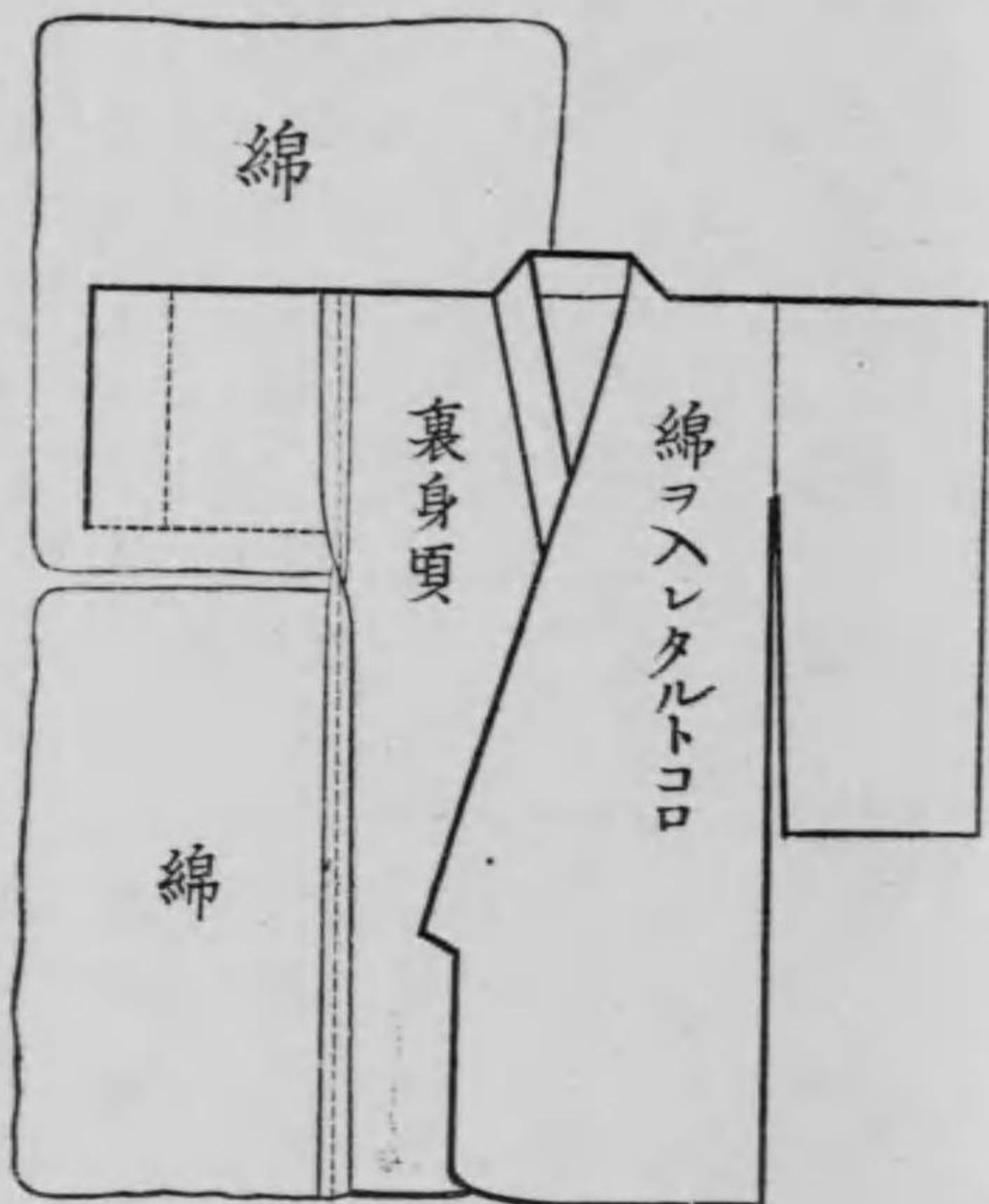
第一圖



裏に折り返して、綿を第一

圖の如く、上は袖附の丈より一二寸長く、下は身丈より三四寸長く、左右は前身頃及び衽幅を合せたるものより一寸程廣くして、總體にひろげ置き、裾口の綿を返して衽綿を裾の上

第二圖



載せ、返しおきたる裾口の綿にて包み、敷きぎれに附け綿をなし、袖附のところにて綿を切り、前身頃に入る、分となし、衽綿の動かぬやうに裾の處に二尺さしを載せ、疊み置きたる裏を其の上に伸べ、それよりひろげ置きたる綿を折り返して、第二圖の如く

左の前身頃及び袖に入れ、残りたる處には別に綿を入れ、衿下のところにも七八分幅程のもの別に一枚を入れて、下の綿と共に幅標より折り返し、襷先を拵へ、敷きぎれに附け綿をなしてよく整へ、表身頃の衿及び裾口のところより手を入れて、靜に表をかぶせ、縫ひ目を合せて、よくひきのばしおき、次に右前も同じ仕方にて入るべし。かくて全體入れ終らば、肩の處に兩手を入れ、兩脇共に表裏の縫ひ目を合せて十分引き伸ばし、次に袖及び衿を引き合はすべし。

注意 一つ身、三つ身等の子供物は、暖き地方を除く外綿を二枚入るゝを普通とす。時には肩より脊に亘りて三枚入るゝことあり。

6 假綴及び衿付け方 綿を入れ終らば、直ちに裾及び衿下に假綴をなすべし。其の仕方は、表を見て裾を己れの方に向け、針に

て能く綿を引きよせ、裾口より五分程上の處を躰絲にてあらく綴ち、衿下は裏袖に綿を含め、亦躰絲にてあらく綴ち置くべし。

次に部分縫の通り袖口を衿付け、後前の袖附及び身八つ口に四つ留をなし、能く釣り合を見てこれを衿付け、襷先を整へ、衿下を衿付け、襷先は小針に二三針衿付け返しおくべし。又衿下は綴を入れざるが故に、綿に絲を通して衿付け行くべし。

7 衿綴及び衿衿 能く表裏を合せて脊、衿肩廻し、劔先、衿先等に待針をなし、下前の方より衿附の縫ひ目の上を一寸程の針目にて綴ち行き、始め終りを一針返して打ち留をなすべし。

次に衿附の終りに、左右とも身頃の表裏と衿と三枚を合せて四つ留をなし、標の通り幅を合せて衿先を縫ひ、裏の方に返し、薄く綿を入れて表を引き返し、三つ衿を入れ、よく綿を整へて幅

を二つに折り、脊、衿、肩、劔先、衿先其の他處々に待針をなして、衿のねぢれぬやうに注意して、下前より紵け行くべし。

8 縦綴及び横綴 表裏の丈及び縫ひ目をよく引き合せて、裾口より一尺程の間、兩脇及び衿に縦綴をなし、上前は表を、下前は裏を見て、何れも裾口の方より綴ち始む。次に三つ身衿の時の如く、衿を除きて後前の裾に横綴をなすべし、其の針數は、後身頃は表に九針、裏に四針、前身頃は、表に五針、裏に二針とし、各縫ひ目には表裏共に別に一針づゝ出すものとす。

右終らば、掛衿をかけ附紐をつくべし。其の仕方はすべて單衣の時に同じ。

それより三つ身衿の時の如く、仕上げをなして疊みおくべし。

【設問】

表に切り下げある襖の標附け方を述べよ。

一つ身綿入の縫ひ方順序を問ふ。又其の綿の入れ方は如何。

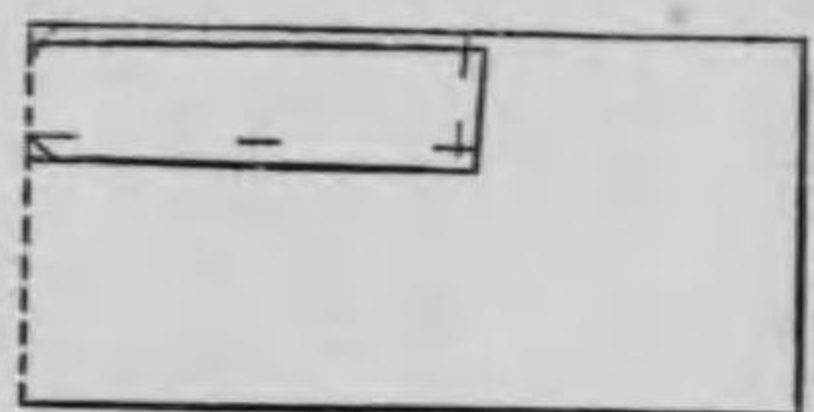
附紐の附け方に於て、男兒と女兒と異なるところを述べよ。

第十三章 三つ身綿入

第一 部分縫

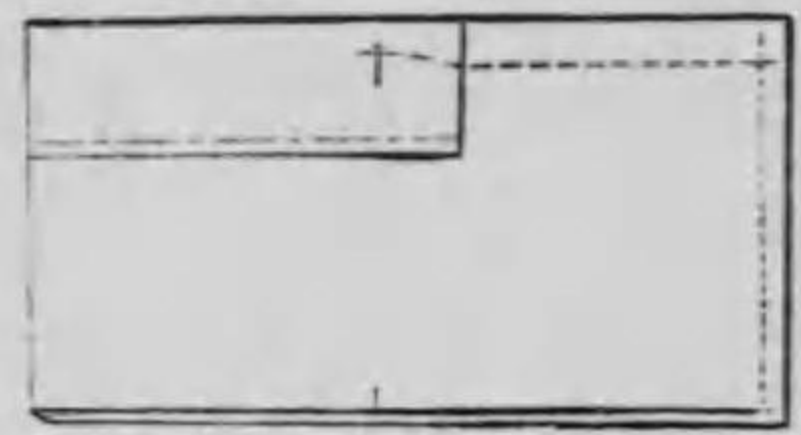
一 袂袖縫ひ方

標附け方 並幅二尺五寸の運針用布二枚と一尺八寸の四つ割切一枚とを取りて、表裏の袖及び袖口切と看做し、表を中にして二つに折り、先づ表袖は衿の時の如く丈、口明、附幅の標を附け、次に裏袖の上に袖口切を圖の如く幅一分ひきて載せ、袖口掛の標をなし、後表に準じて各部分の標をなすべし。



但し袖口明にて五厘、八つ口にて一分をつめ、又裏袖の狭きときは、袖口下に一寸幅程の持ち出し切をつけ、この切より一分減きて袖口切を載せ標をなすべし。又袖口の衽を一分五厘出す時は、衽の二倍三分に紵代を加へて標をつけ、それより袖幅を計るべし。裏袖幅は八つ口の處にて表袖幅より五厘つめて標を附くべし。

縫ひ方 先づ裏袖に袖口切を掛け、次に表裏の袖を標の通り縫ひ、裏袖は袖口明の標の五分程下より、圖の如く斜めに五厘程縫ひ出し、おく引き返して平躰をかけ、袖口に含み綿をなすべし。含み綿は並の青梅綿二枚若しくは三枚を重ね、薄きものは三枚、長さは口明の二倍より二寸程長くし、最初先づ一寸幅のもの一枚を切り、次に六七分幅のもの一枚若しくは二枚を切りて其



の上に乗せ、左の食指を真中より稍向ふにあて、順次に右手にて二つに折り、其の上を手にて平に壓へて綿の離れぬ様になし、夫より真中を袖の山標に合せ、下方を掛け針にて張り、袖口の五分程下より綿を含み始め、口明の二分程下の處に小さく一針表に出し、五分程先きの處にて袖口衽だけ幅を出し、又此處に小さく一針表へ出し、綿を弛めに含ませつゝ、順次綴ち行くこと、一つ身綿入の袖口綴の如く一針は綿を抄ひ、一針は小さく表に出し、山の中央は兩方へ一分づゝ離して左右に針目を出し、又前の如くして綴ち行き、終りも綴ち始めの如く針目を出して打ち留をなすべし。但し袖口表へ出づる針目は、一寸より一寸二三分迄の隔りとして、豫め其の數を見計ひおき標しおくも可なり。

次に八つ口に含み綿をなす。其の仕方は一つ身綿入と同じく、先づ七八分幅に綿を切りてこれを二つに折り、裏の袖幅標より五厘つめて折をつけ、袖口の時の如く幅の折り角より三四分下りて一寸程の針目にて綴ち行くべし。次に表裏袖の山標を合せ寸法通りに袖口衽を出して、口明元より五六分の間は少しく表を張り目に、他は表を弛めにして待針を刺し、口明元は圖の如く表裏合せて四つ留をなし、其の絲を切らずして直ちに袖口を表三分、袖口二分の針目にて紵け行き、口明元に至らば絲を切らず袖口元の下より袂の處まで綴ち置くべし。又袖口元五六分の間は袂の如く丸くし、針目は細かく紵け、他は綿を抄はぬ様にし、表



に襷などの出来ぬ様注意して紵け行くべし。

それより八つ口の表裏を合せ、表を弛めにして待針を打ち、殊に袖下の前後は多く表を弛め、一つ身綿入の時の如く二三分の針目にて紵け行くべし。

注意 綿入の袖口は袂と同じく衣服仕立方中の要所なれば種々の地質につき十分練習して巧に縫ひ上げんことを務むべし。

二 元祿袖縫ひ方

標附け方 並幅二尺五寸の運針用布二枚と一尺八寸の四つ割切一枚とを取りて、表裏の袖及び袖口切と看做し、表を中にして二つに折り、先づ表袖に袷元祿袖の時の如く丈・口明・附幅・丸みの標をつけ、次に裏袖の上に袖口切を幅一分ひきて袖口掛の標

をなし、のち表に準じて各部分の標をなすべし。

但し裏は袖丈にて五厘八つ口明、袖口明共に一分を減じ、袖幅は八つ口にて五厘つめ、又袖口明の縫込は表の縫込より袖口衤の二倍(即ち一分五厘として三分)出して標を付け、袂の丸は縦三寸、横三寸五分、角より一寸五分入りたる處へ點を附し、それに倣ひて丸形になすべし。初心のものには成るべく丸型を用ふるをよろしとす。

縫ひ方 先づ標の通り裏袖に袖口切を掛け、表裏の袖を表を中にして標の通り縫ひ、(左袖は袖下より右袖は袖口より)並の着せにて内袖の方へ折り返し、丸みは單衣及び袴の時の如く、前の縫目より二三分程離して三度程縫ひ、其の絲を引きて程よく縮め、終りは平に襷になして返し針にて留め置くべし。次ぎに表を

出して平躰をかけ、袖幅を標通り折り袂袖の時の如く袖口明に含み綿をなし、袖口元に四つ留をなし、口元五六分の間は表布を張り、他は表の方を稍弛めにして紵け、其の絲を切らずして袖口下一寸位綴ち附け、次ぎに八つ口に綿を含ませ、表裏を正しく合せ、袖下の縫目を合せて待針をなし、表を稍弛めにして平躰をかけ、八つ口を紵け、袖下の縫目を八つ口より丸みの曲り始めまで中綴ちをなすべし。

【設問】

袂袖及び元祿袖の袖口綿の含め方及び綴ち方を述べよ。

袂袖袖口紵の布の釣合につき如何に注意すべきかを問ふ。

第二 三つ身綿入積り方・裁ち方

一 袂袖裁ち方

表用布 一丈四尺(半反)(本書一四八頁参照)
裏用布 通し裏 總丈一丈四尺一寸五分

表用布の總丈に衽の六倍を加ふべし。

普通裁ち切り寸法

通し裏

袖丈 一尺四寸	袖幅 七寸七分	身丈 二尺八寸五分
衿肩明 一寸四分 <small>外に一分切り込む</small>	後幅 五寸八分	衽幅 三寸二分
衿丈 四尺七寸	衿幅 一寸三分	

注意

右は前に述べたる單衣衿の裁ち切り寸法に準じて定めたるものなり。
すべて裏用布は衿縮入とも表に準じて定むべきものなり、故に表の寸法の異なるときは、隨て裏用布の寸法を異にす。

積り方

$$14 \times 4 + 28.5 \times 3 = 141.5^{\text{寸}} \dots \dots \dots \text{總丈}$$

$$(141.5 - 14 \times 4) \div 3 = 28.5^{\text{寸}} \dots \dots \dots \text{身丈}$$

$$(141.5 - 28.5 \times 3) \div 4 = 14^{\text{寸}} \dots \dots \dots \text{袖丈}$$

之を公式にて示せば左の如し。

$$\text{總丈} = \text{袖丈} \times 4 + (\text{身丈} + \text{衽の二倍}) \times 3$$

$$\text{身丈} = (\text{總丈} - \text{袖丈} \times 4) \div 3$$

$$\text{袖丈} = \{ \text{總丈} - (\text{表身丈} + \text{衽の二倍}) \times 3 \} \div 4$$

裾廻し附 胴裏總丈一丈一尺四寸五分(本書一四九頁参照)

裾廻し總丈三尺

普通裁ち切り寸法

胴裏丈 一尺九寸五分 裾廻し丈 一尺

此の他の寸法は凡て通し裏の時に同じ。

積り方

$$140 - 114.5 + 0.25 \times 6 + 1 \times 3 = 30^{\text{寸}} \dots \dots \dots \text{裾廻し總丈}$$

$$30 \div 3 \dots\dots\dots = 10^{\text{寸}}$$

$$140 - 30 + 0.25 \times 6 + 1 \times 3 = 114.5^{\text{寸}}$$

$$28 - 10 + 0.25 \times 2 + 1 = 19.5^{\text{寸}}$$

之を公式にて示せば左の如し。

$$\text{裾廻し丈} = \text{表總丈} - \text{胸裏總丈} + \text{衿} \times 6 + \text{縫代} \times 3$$

$$\text{裾廻し丈} = \text{袖廻し總丈} + 3$$

$$\text{胸裏總丈} = \text{表總丈} - \text{裾廻し總丈} + \text{衿} \times 6 + \text{縫代} \times 3$$

$$\text{胸裏丈} = \text{表身丈} - \text{裾廻し丈} + \text{衿} \times 2 + \text{縫代}$$

二 筒袖裁ち方

表用布 三つ身單衣・衿筒袖に同じ(本書八五頁及一五〇頁参照)
 裏用布 通し裏 總丈一丈三尺八寸(本書一五〇頁参照)

表用布の總丈に衿の八倍を加へたるもの。

普通裁ち切り寸法

通し裏

袖丈	六寸五分	身丈	二尺八寸五分
衿肩明	一寸四分 <small>外に一分 切り込む</small>	後幅	五寸八分
衿下り	二寸	衿幅	半幅
衿丈	四尺八寸(山はき)		

積り方

$$6.5 \times 4 + 28.5 \times 4 - 2 = 138^{\text{寸}}$$

$$(138 - 6.5 \times 4 + 2) \div 4 = 28.5^{\text{寸}}$$

$$\{138 - (28.5 \times 4 - 2)\} \div 4 = 6.5^{\text{寸}}$$

之を公式にて示せば左の如し。

$$\text{總丈} = \text{袖丈} \times 4 + \text{身丈} \times 4 - \text{衿下り}$$

$$\text{身丈} = \text{總丈} - \text{袖丈} \times 4 + \text{衿下り} \div 4$$

袖丈 = (總丈 - (身丈 × 4 - 衿下り)) ÷ 4

裾廻し附 胴裏 總丈八尺四寸五分(本書一五二頁参照)

裾廻し總丈四尺五寸

普通裁ち切り寸法

胴裏丈 一尺九寸五分

衿先丈 一尺三寸

裾廻し丈 一尺

衿裾丈 一尺五寸

此の他の寸法は通し裏に同じ。

積り方

$$136 - 84.5 + 0.25 \times 6 + 1 \times 3 - 11 = 45.5 \dots\dots\dots \text{裾廻し總丈}$$

$$(45 - 15) \div 3 \dots\dots\dots = 10 \dots\dots\dots \text{裾廻し丈}$$

$$136 - 45 + 0.25 \times 6 + 1 \times 3 - 11 = 84.5 \dots\dots\dots \text{胴裏總丈}$$

$$28 - 10 + 0.25 \times 2 + 1 = 19.5 \dots\dots\dots \text{胴裏丈}$$

之を公式にて示せば左の如し。

裾廻し總丈 = 表總丈 - 胴裏總丈 + 衿 × 6 + 縫代 × 3 - 衿先丈

裾廻し丈 = (裾廻し總丈 - 裏衿丈) ÷ 3

胴裏總丈 = 表總丈 - 裾廻し總丈 + 衿 × 6 + 縫代 × 3 - 衿先丈

胴裏丈 = 表身丈 - 裾廻し丈 + 衿 × 2 + 縫代

注意 裏衿には裏衿先に縫込あるを以て積り方に縫代衿等を省きあり。

又胴接ぎの縫代として一寸を取りたれども、裾廻しの破れたるときこれを切り拂ひて胴裏をのばす時の用意に、胴裏の寸法を長くなしおくを可とす。

【設問】

三つ身綿入の裁ち方につきて、表と裏と異るところを述べよ。

一丈三尺五寸の布を用ひて袂袖通し裏の三つ身綿入を調製せんとす、裏地總丈何程を要するか。但し出衿二分五厘として裏に一寸の内揚をなすべし。

袖丈六寸、身丈二尺七寸仕立上げの三つ身綿入の筒袖を調製するに、裾廻しの高さを總べて一尺五寸づゝ附くるとせば胴裏總丈何程を要するか。

第三 三つ身綿入仕立方

一 普通仕立上げ寸法

袂袖・筒袖共に三つ身単衣及び袷の仕立上げ寸法に同じ。(本書八八頁及一五四頁参照)

但し袖口衽は一分五厘、裾衽は二分五厘とす。

二 標附け方

- 一 袖口掛
- 二 表袖
- 三 裏袖
- 四 表後身頃
- 五 表前身頃
- 六 裏後身頃
- 七 裏前身頃
- 八 表裏の衽
- 九 衿

注意 裾廻し附のものは、袷標附けの時と同じく、先づ裏身頃に胴接ぎの標をなし、次に各部分に標をなすべし。

1 袖 袂袖・筒袖・元祿袖共に寸法通り、一つ身綿入及び部分縫の時と同じく表裏に標をつくべし。

2 表身頃 三つ身袷の通り、表を中にして左右の身頃を合せ、後身頃を上、衿肩明を手前にして山より二つに折り、山・丈・袖附身入つ口、後幅の標を附け、次に後身頃を左に開きて前身頃を出し、前幅・衽下りの標をなすべし。

3 裏身頃 表身頃の時と同じく表を中に左右の身頃を合せ、通し裏の時は丈を衽の二倍だけ長くし、其の他は表身頃に準じて標を附くべし。裾廻しを附くるときは、初めに胴裏の上に裾廻しを四枚重ねおき丈をはかりて、丈は表の丈に衽の二倍と胴接ぎのきせの分一分を加ふ(胴接ぎの標を附け、先づ之を接ぎ合せ、縫目は胴裏の方に返して隠し、躰をなし、後、通し裏の時と同じ

三 縫ひ方順序

- 一 表裏の袖
- 二 表身頃及び衽衿
- 三 裏身頃及び衽
- 四 丈調べ
- 五 表裏袖附
- 六 裾合せ
- 七 袖口及び八つ口の含み綿
- 八 綿入れ
- 九 裾の假綴
- 一〇 袖口衿
- 一一 八つ口衿
- 一二 衿下衿
- 一三 衿綴及び衿衿
- 一四 縦綴
- 一五 横綴
- 一六 掛け衿

1 袖 部分縫の時の如く先づ左右の表袖を縫ひて、袖下より袖口明へ平襷をかけ、裏袖も左右を縫ひて八つ口二三寸に平襷をかくべし。

2 表身頃及び衽衿 先づ脊脇衽と衿の時の如く縫ひ、衿は單衣の時と同じく、下前より順次附け行き、各縫目に平襷をかけおくべし。

3 裏身頃及び衽 通し裏なれば表と同じ様に縫ひ、袖疊みにして平らに板上に置き、其の上に表も同じ様に裏を出し袖疊みにして肩の處へ待針をなし、衽の出具合を検すべし。

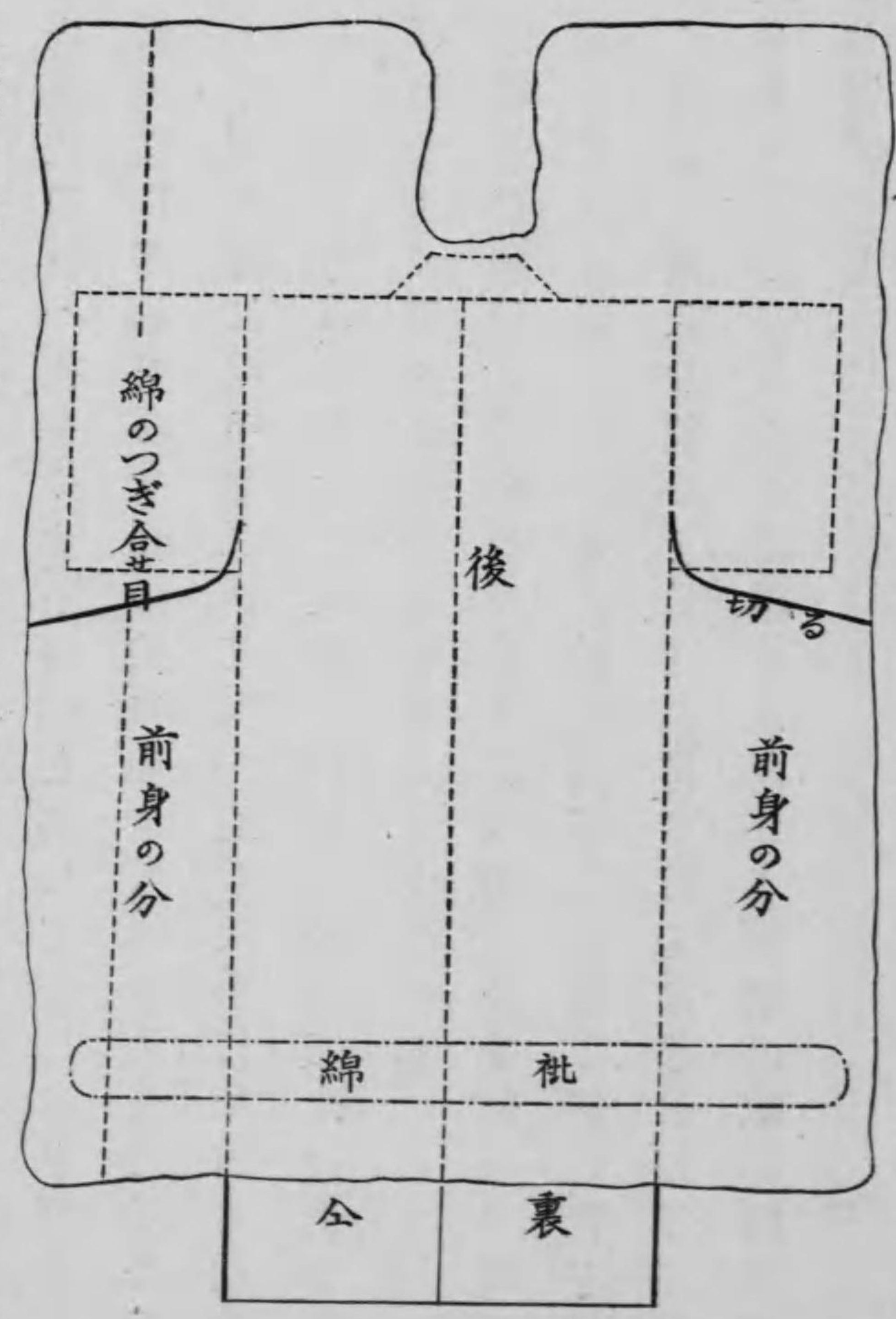
4 袖附 表裏の袖を單衣の時と同じくつけ、始めと終りを返し針にし、袖の方を稍弛めになして山は針目を細かくして附け、表は袖の方へ、裏は身頃の方へ折り返して平襷をかくべし。

5 裾合せ 丈標の通り表裏に折を附け、各縫目を合せて裏を稍張りめに待針をなし、表を見て四裾を縫ひ、縫目毎に返し針をなし、裾をあくる時は裏の方を見て縫ふこと一つ身の時と同じくし、一分のきせにて折を附け、(裾先は五厘衽には隠し襷、四裾及び表の衿下には平襷をなすべし。

注意 裾廻しの色、表の地色と異なるものは、裾の時の如く、四裾にも隠し襷をか
べし。

6 含み綿及び綿入れ 部分縫の時の如く左右の袖口・入つ口
に含み綿をなし、次に裏を出して夜着疊みとなし、一つ身綿入
と同じく、表の後を上にして長く伸べ、初めに衽綿を作るべし。
衽綿は二寸幅のものを裾丈に二三寸加へたる長さに切りてひ
ろげ、其の上に一寸幅のもの二枚を中央に載せ、少しく一方によ
せて重ね二つに折りおき、表の後身頃及び袖の上に眞綿を平ら
に引き、其の上に綿を伸ぶること圖の如く、綿を縦にひろげ、裾は
衽標より三四寸多く出し幅は衽幅よりも一寸程廣くなし、前に
裾より出し置きたる綿を衽の二倍出る様にして衽綿をくるみ、
衽綿を衽の二倍出して其の上に二尺指をおき、前に疊みおきた

る(くるみ眞綿になすときは綿を伸べ終りて其の上に眞綿を引



くべし)裏を順次に伸べ行き、脊線の歪まぬ様に表裏を合せ、眞綿

を引き、残しおきたる綿を上に乗せ、丁寧につき合せ、衿下には別に八分幅程の綿一枚をのせ、下の綿と共に二つに折り、袷先を拵へ、また總體に眞綿をひき、表の袖口明より手を入れて袖を半ば返しおき、肩の處に兩手を入れて引き返し、次に片前も左の如く、なして綿を入れ、兩脇共に表裏の縫目を合せて十分引き伸し、袖及び衿をよく引き合せて夜着疊みとなすべし。

7 假綴及び衿付け方 裾及び衿下に假綴(一つ身綿入の時に同じ)をなし、次に部分縫の通り袖口及び八つ口を衿付け、衿下は綿をよく含ませ、袷先を整へて衿下を衿付け、袷先は小針に二三針衿付け返しおくべし。又衿下は綴を入れざるが故に綿に絲を通して衿け行くべし。

8 衿綴及び衿衽 表裏の脊縫、衿肩廻し、劔先、衿先及び其の間

に待針をなし、下前の方より衿附の縫ひ目の上を六七分の針目にて綴ち行き、始め終りを左右とも身頃の表裏と衿と三枚を合せて留をなし、標の通り幅を合せて衿先を縫ひ裏の方に返し、薄く綿を入れて表に引き返し、三つ衿を入れよく綿を整へて衿幅通りに折り、衿の厚さを全部同じくし、脊衿肩、劔先、衿先其の間々に待針をなし、衿のねぢれぬやう注意して下前より衿け始め、始めも終りも返し衿となし、打ち留をなして衿の中へ絲を引ききて切るべし。

9 縦綴及び横綴 表裏の丈及び縫目をよく引き合せ、裾口より一尺程の間、兩脇及び衿に縦綴をなすこと一つ身綿入と同じく(上前は表、下前は裏を見て何れも裾口より綴ち始む)なし、次に三つ身衿の時と同じく横綴をなし、掛け衿、附紐、肩揚げ、腰揚げ

等を衿の時の如くなして仕上げをなし、絲屑綿等をきれいに拂ひ、夜着疊みとなしておくべし。

【設問】

- 襦の上げ方を述べよ。
- 三つ身綿入の縫ひ方順序を問ふ。
- 肩揚げ腰揚げの仕方を述べよ。

第十四章 四つ身綿入

第一 裁ち方積り方

裁ち方積り方共に四つ身衿に同じ。(本書一六四頁参照)

但し 綿入は衿を多く出し、袖口衿も多く出すを以て、表袖幅より裏袖幅の狭きときは、袖口下へ細き切を入ること三つ身綿入の時と同じくすべし。

第二 四つ身綿入仕立方

一 普通仕立上げ寸法

四つ身衿仕立上げ寸法に同じ。

但し袖口衿一分五厘 裾衿二分五厘若しくは三分とす。

二 標附け方

- 一 表袖
- 二 裏袖袖口掛とも
- 三 表身頃後前衿
- 四 裏身頃後前衿
- 五 衿

1 袖 表裏袖共に三つ身綿入の如く標をなすべし。

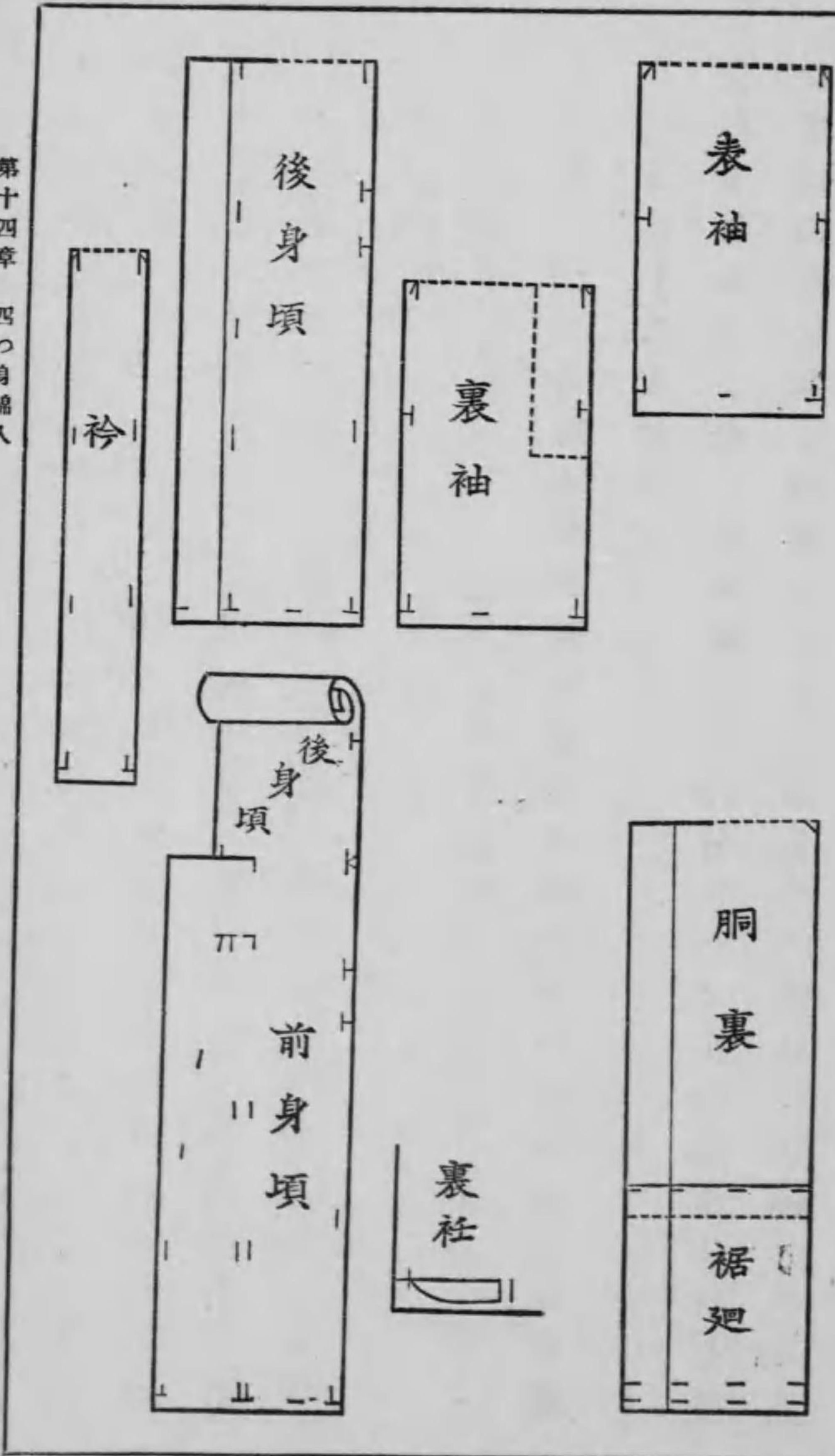
2 表身頃 衿の通り先づ表身頃の左右を表を中にして後を上
上に肩より二つに折り、山丈袖附八つ口後幅肩幅の標をなし、後
身頃を左に開きて前布を出し、後の標を前布によく附け直し、衿

肩より直線に裾迄糸を引きて前幅標をなし、裾口三分、衿下四分、衿下り八分及び衿下りの標を付け、衿下りにて八分離れたる處より尙一分はなれたる處に標をなし置き、衿下及び衿幅、合袂幅の標をなし、劔先の一分離れたる處と合袂幅の標とに糸又は二尺指をあて衿附の標をなすべし。

3 裏身頃 表身頃に準じて丈を定め、衿の二倍を出して標附けをなす(通し裏の時)。裾廻しを附くるときは表身頃の丈に衿の二倍と胴接ぎの着せの分として一分を加へて標をなし、次ぎに衿の時の如く胴接ぎを縫ひ付け置き、表身頃の標付けと同じ順序に標附けをなす、衿には袷形をあてて篋を附けおくべし。

4 衿 先づ表衿に裏衿を縫ひ付け置き、表を中にして二つに折り山・丈・縫代・幅の標をなすべし。

但し衿丈は衿肩明・衿下り・衿附の長さともに一分を加へたるものなり。



三 縫ひ方順序

- 一 表裏の袖
- 二 表身頃及び衽
- 三 裏身頃及び衽
- 四 丈調べ
- 五 衿附及び裾合せ
- 六 表裏の袖附
- 七 袖口及び八つ口含み綿
- 八 綿入れ
- 九 裾の假綴
- 一〇 袖口縮
- 一一 八つ口縮
- 一二 裾下縮
- 一三 衿綴及び衿縮
- 一四 縦綴及び横綴
- 一五 掛け衿

1 袖 三つ身綿入袖の通り裏袖に袖口をかけ、表裏の袖を縫ひ引き返して平襷をかくべし。

2 表身頃及び衽 表身頃の衿肩明をかゝり、脊脇及び衽を縫ひて、衿の時の如く絲留をなして折をつけ、縫目に烙鋺をかけ袖疊みとなすべし。

3 裏身頃及び衽 裏の衿肩明をかゝり脊脇衽と表の如く縫ひ、各絲留をなして折をつけ、但し裾口は少しく縫代を深くして幅をつむること衿の如し、脇明下は縫込を開きて割り襷をなし、各縫目の裾口に平襷をかけ、衽は衽先にも二三寸の處へ平襷をかけ袖疊みとなすべし。

4 丈調べ 裏身頃の袖疊みとなしたるを裁板の上に正しく置き、其の上に表身頃をのせ待針をなして、襷のなきやうに表裏の丈を調ふべし。

5 衿附及び表裏の袖附 衿の山標と脊縫とを合せて待針を刺し、次に衿肩衽先合襷幅及び其の間にも待針をなし、衿肩廻しは衿の方を稍弛めにすべし、下前より附け始め衽先衿山にては一針返し針をなし、始め終りの留は抄ひ留にして一二寸程返し縫をなすべし。

次に表の袖山と表身頃の山とを合せ待針を刺し、單衣の時の如く附け始めは二三針返し針とし、袖の方稍、地めにして附け、山の部分は針目を細かくし、附け終りも亦二三針返し針をなして抄ひ留をなし更に返し縫をなすべし。裏も表の如くして袖を附くべし。

6 裾合せ 表裏の裾口を合せ(裏を張りめにして待針をなす)表を見て四裾を合せ、一つ身三つ身の如く裏を見て左右の裾をあげ、一分の着せにて(襖先五厘隠し)襜をかけ、他の四裾には平襜をかくべし。

7 袖口及び八つ口の含み綿 三つ身綿入の如く袖口・八つ口に含み綿をなし、各縫目に烙鏝をあて裏返して夜着疊みをなすべし。

8 綿入れ 表身頃の後の方を上にして表身頃をひろげおき先づ衽綿をつくる。衽綿は二寸幅の綿を長くひろげ、其の上に一吋幅のものを二枚中央におき、少しく方よせて二つに折り、丈は總體の幅より二三寸長くなしおき、前にひろげたる表身頃の上に眞綿をひき(眞綿を入れざるものは直ちに綿を入る、又一方に眞綿をひくときは、先づ眞綿をひきおきて後に綿を入る、方宜し)三つ身綿入の如く綿を表より丈幅を廣く出して縦にひろげ行き(丈は上を袖丈だけ長くし、下は衽標より四寸程長くし、幅は前幅衽幅を合せたるものより一寸程廣くなしおく)敷きぎれに綿をつぎ合せ裾綿を上に戻して前に拵へおきたる衽綿を載せ上より之を包み袖附の處にて綿を切りて前身に入る、分となす、それより上に眞綿を引き衽綿の動かぬやうに裾口の處に

二尺指を載せ、疊みおきたる裏身頃を其の上に伸へ行き、袖の足らぬ所には別に綿を入れ、脊線の片よらぬやう表裏を合せ、眞綿の引き残したるものを其の上に載せて平らになし、なほ足らざる處に眞綿を引き、前身頃の分を折り返して上に載せ、衿下には別に八分程の綿を一枚のせ、下の綿と共に二つに折り、袷先を拵へ、又總體に眞綿を引き、表の袖口明より手を入れて、袖を半ば返しおき、表の衿及び衿下のところより手を入れて、表をかぶせ、よく引き伸ばし、次に片前も同じ仕方にて入るべし。

斯くて全體入れ終らば、肩の處に兩手を入れ、兩脇共に表裏の縫目を合せて十分引き伸ばし、次に袖及び衿をも引き合はすべし。

9 假綴及び衿付け方 裾の假綴は、三つ身の時の如く表を見て裾を己れの方にむけ、針にて能く綿を引きよせつゝ、裾口より五六分上を麩絲にてあらく綴ち行き、又衿下は裏衿に綿を含ませ、麩絲にて表裏ともにして綴ち置くべし。

次に三つ身綿入の通り、袖口及び八つ口を衿付け、衿下は綿を綿に通して衿付け、衿を綴ち合せ、衿附の始め終りに三つ留をなし、衿先を縫ひ裏に返して綴ち付け、三つ衿を入れ、衿の時の如く脊・衿肩・衿先衿先及び尙其の間にも待針をなし、裏の方を見て三四分の針目にて下前より衿付け行くべし。

10 縦綴及び横綴掛付け衿 能く表裏の縫目を合せ、脊及び上前は表を見て何れも裾口より二尺五寸程上まで綴ち、綴ち終りは縫目を開きて打ち留となし、それより内へ針を入れて、綿を切るべし。横綴も衿の時と同じ針目にて其の方法も亦同じ。

右終らば掛け衿をかけ、肩揚、腰揚をなし、烙鋏或は火熨斗をかけて仕上げをなすこと、衿の時に同じ。

【設問】

衿と異なる點を挙げよ。
綿入れ方の順序方法を述べよ。
横綴の仕方を問ふ。

第十五章 本裁女單衣

第一 裁ち方・積り方

一 棒衿裁ち方

用布 並幅長さ二丈八尺八寸

普通裁ち切り寸法

袖丈 一尺六寸

身丈 三尺九寸

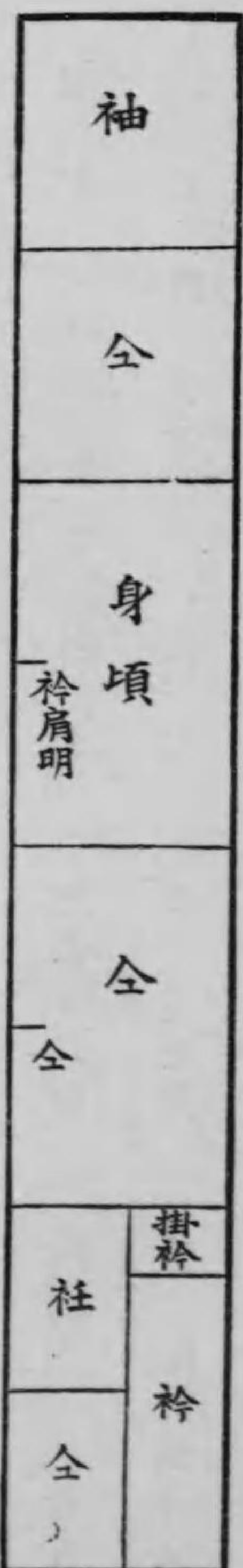
衿肩明 二寸五分

衿下り 五寸

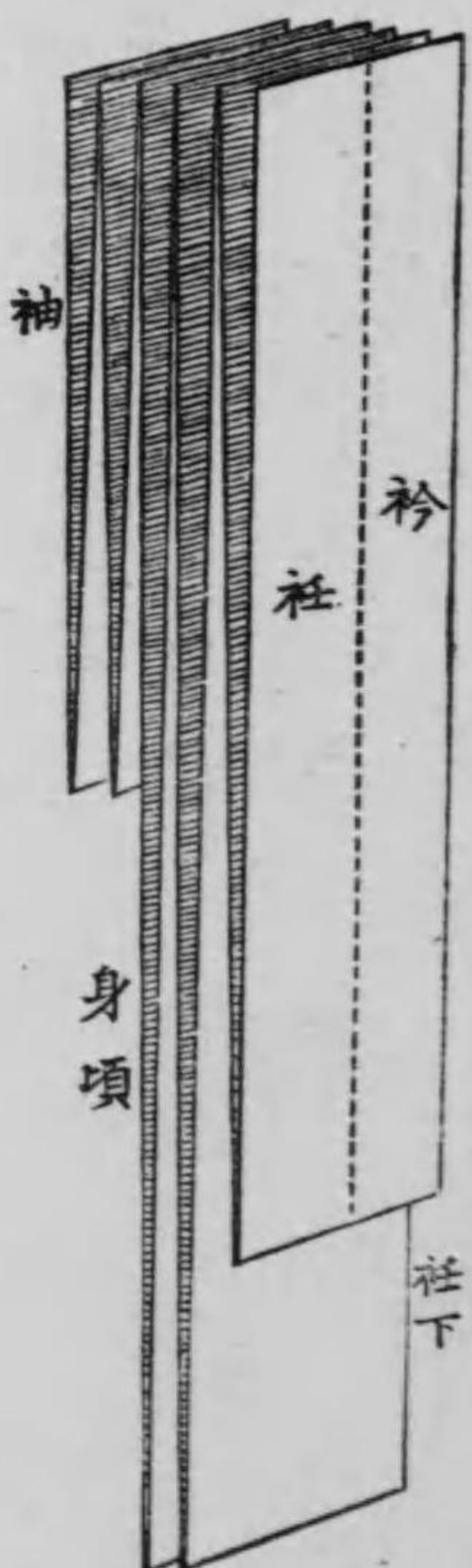
衿幅 四寸八分

衿丈 四尺七寸

裁ち方の圖



折り方の圖



積り方

$$16 \times 4 + (39 \times 6 - 5 \times 2) = 285^{\text{寸}} \dots \dots \dots \text{總丈}$$

$$(288 - 16 \times 4 + 5 \times 2) \div 6 = 39^{\text{寸}} \dots \dots \dots \text{身丈}$$

$$\{288 - (39 \times 6 - 5 \times 2)\} \div 4 = 16^{\text{寸}} \dots \dots \dots \text{袖丈}$$

$$\begin{aligned} \text{總丈} &= \text{袖丈} \times 4 + (\text{身丈} \times 5 - \text{衿下} b) + \text{鈎下} \\ \text{身丈} &= \{ \text{總丈} - (\text{袖丈} \times 4 + \text{鈎下}) + \text{衿下} b \} \div 5 \\ \text{袖丈} &= \{ \text{總丈} - (\text{身丈} \times 5 - \text{衿下} b + \text{鈎下}) \} \div 4 \end{aligned}$$

右裁ち方終らば、左の寸法によりて肩當居敷當用布を裁ち、又三つ衿ぎれをも揃へおくべし。

肩當用布 並幅長さ二尺六寸

後丈 七寸

前丈 六寸

衿肩明 表と同寸

居敷當用布 並幅一尺三寸乃至一尺五寸

三つ衿ぎれ 並幅三寸

【設問】

本裁棒衿の裁ち方につきての三公式を述べよ。

本裁鈎衿の裁ち方につきての三公式を擧げよ。

並幅長さ二丈九尺の反物にて女物を裁たんとす。袖丈一尺七寸五分の裁

ち切りとせば、身丈何程なるか。但し衿は棒裁ちとす。

並幅一反にて女物鈎衿を裁たんとするに、身丈三尺九寸、鈎下二尺三寸五分の裁ち切りとせば、袖丈何程となるか。

第二 本裁女單衣物仕立方

一 普通仕立上げ寸法

袖丈	一尺五寸五分	袖口明	六寸乃至六寸五分	袖附	六寸五分
袖幅	八寸五分	身丈	いっばい	身八つ口	三寸
衿肩明	二寸三分	後幅	七寸五分	肩幅	八寸
衿下り	六寸	前幅	六寸	抱幅	五寸四分
衿下	一尺九寸	衿幅	四寸	合襖幅	三寸五分
衿幅	一寸五分	衿	一尺六寸五分		

注意 右に掲げたるは、普通寸法の標準を示したるものなれども、人々の身長・肥

瘦及び用途等によりて、多少の斟酌を要するものなれば、實物の仕立方に於ては、各其の適當なる寸法によるべし。

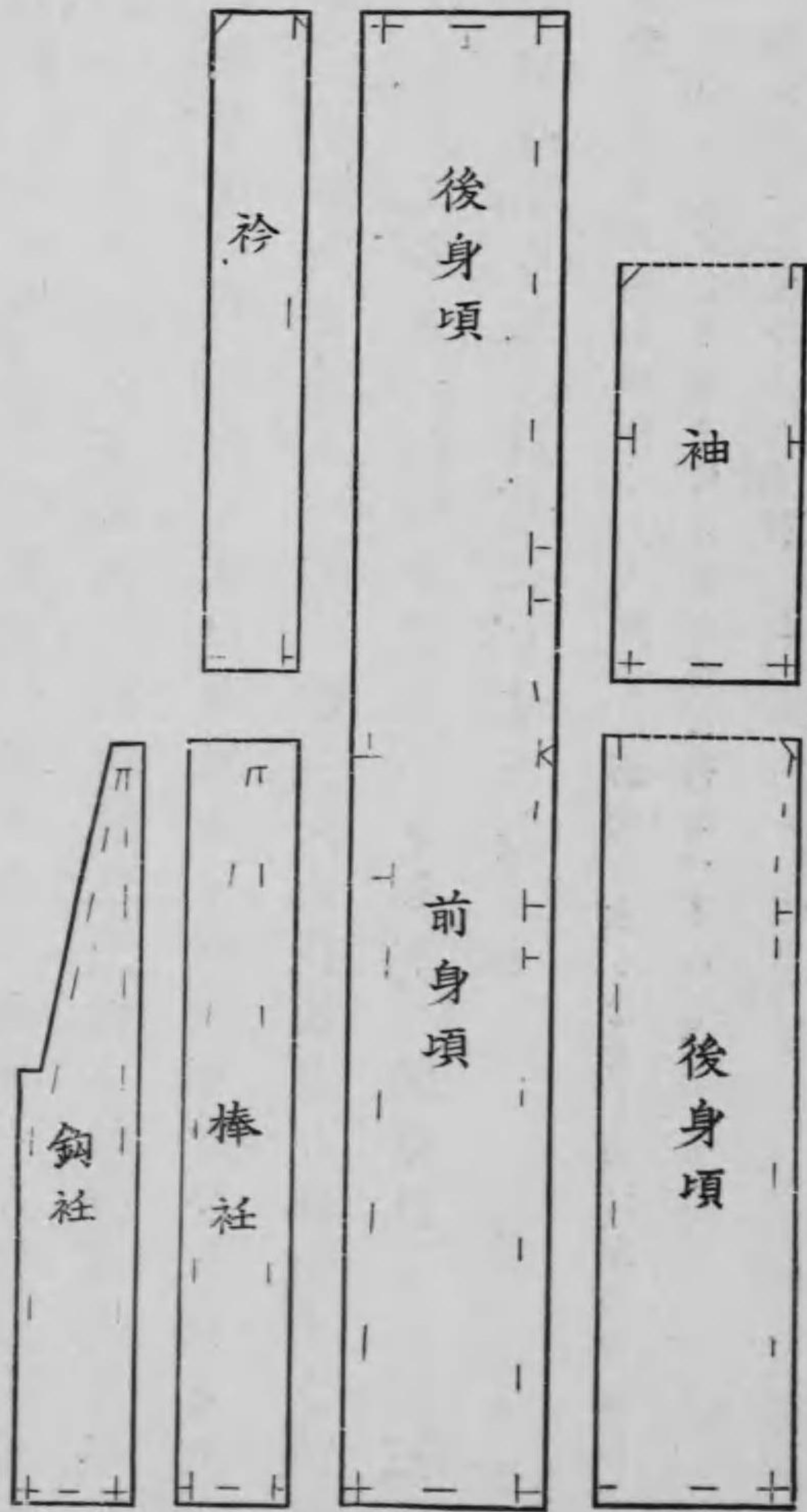
二 標附け方

- 一 袖
- 二 後身頃
- 三 前身頃
- 四 衿
- 五 袴

1 袖 表を中にして片袖づゝ、真中より二つに折りて兩袖を重ね、折り目を左にして下に置き、布の動かぬやうに處々に待針をなして留め置き、寸法通り、山丈口明附幅の標を附くべし。

2 後身頃 表を中にして二枚合せ、衿肩より二つに折りて圖の如く後身頃を上、脊を手前に衿肩を左にして下に置き、寸法通り、山丈袖附身八つ口衿肩明後幅肩幅及び其の中間に標をつくべし。

3 前身頃 上に重ねある後身頃二枚を左に開きて前身頃を出し、後身頃より附けたる篋標を確につけ直し、後衿下り前幅抱



幅及び其の中間處々に衿附の標をなすべし。但し裾口三四寸

の間はほゞ眞直に標すべし。

4 衽 表を中にして左右の衽を合せ、劔先を左に裁ち目を手前にして下におき、寸法通り、裾紵縫代丈衿下幅合襖幅及び衿附の標をなすべし。但し丈は、身丈より衽下りをひきたるものに凡そ一分以内を加ふべし。即ち丈の長短及び棒裁ちと、鈎裁ちとによりて多少の斟酌を要すべきなり。又裾口より二三寸の間は、前身頃の如く眞直になすべし。

注意 衽布衿附の間短くして餘りに劔先の太くなるものは、左の寸法によりて標をつけ、少しく繰りたる如き形に衿をつくべし。

劔先より二寸下りて六分。

劔先より五寸下りて一寸三分。

劔先より一尺下りて二寸四五分とす。

5 衿 表裏衿共に表を中にして各中央より二つに折り、裏衿

を下に表衿を上にして重ね、山丈縫代幅の標をつくべし。但し丈は、出来上りの衿肩明と、衽下りと、衿附の長さ、外に一分を加へたるものとし、又衿先はなるべく五分餘の縫ひ込みを置くべし。衿附の際は丈標の一分内を衿下標に合せ、衿先は丈標の通りに縫ふべし。

三 縫ひ方順序

- 一 袖
- 二 各部かゝり方衿下紵肩當居敷當の裁ち目ふせ方
- 三 脊縫及び肩當居敷當
- 四 脇縫
- 五 衽附
- 六 裾紵
- 七 衿附
- 八 袖附

1 袖 表を出して袖丈を一分の縫代に縫ひ、更に裏を出して右袖は袖下より、左袖は袖口の方より縫ひ始め、口元のところは、何れも抄ひ留をなしてよく留めおき、手前の方に折りをつけ、袖

口を三つ折り衿になすべし。

2 各部かゝり方、衿下衿、肩當、居敷當の裁ち目伏せ、衿肩明及び衿の鈎をかゝり、衿下を三つ折り衿となし、肩當、居敷當の裁ち目を伏せおくべし。但し居敷當は、下部の一方のみ伏せ縫ひをなすものとす。

3 脊縫及び肩當、居敷當 脊を縫ひ、裾口二寸程返し針をなし、次に肩當を向ふにして脊縫代を表の縫ひ目に合せて直ぐ上を縫ひ、この糸を切らずして前の縫ひ目より一分五厘離して再び脊を縫ひ、肩當の幅狭くして袖附の縫代に至らぬものは、左右とも表に耳衿をなし。次に居敷當の中央を脊の縫ひ目に合せて、裏の方に一寸程の針目を出して、あらく綴ちつけ、左右を耳衿に、上方を本衿にすべし。

4 脇縫 後前の身頃を合せて、幅標の通り待針をなし、前布の方を見て縫ひ、上を抄ひ留に、下を返し留になして、前身頃の方に折りをつけ、後布の縫ひ込みを開きて割り躰をなし、その兩側を左右とも一寸三分の針目にて表に綴ちつくべし。但し縫ひ込み少なきものは、下まで開かずして折りたる布の引きつれぬやう、程よく斜に折り返しおくべし。

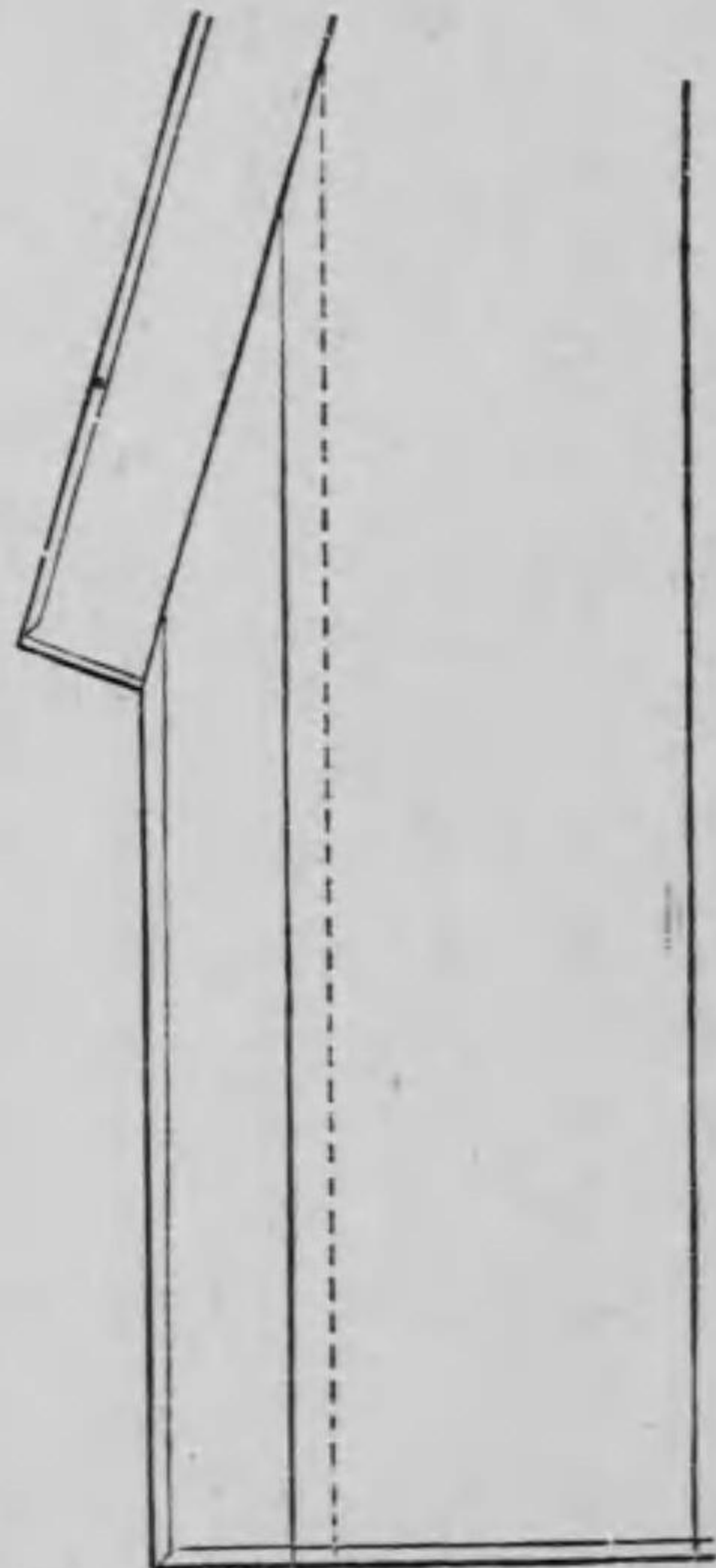
5 衿及び裾衿 前身頃及び衿に標の通り折りをつけ、衿を稍弛めに合せて待針をなし、上前は劔先より、下前は裾口より縫ひ始め、劔先のところは小さく一針返して、更に縫代の方に斜に一寸程縫ひ返しおき、衿の方に折りをつけ、縫ひ込みを表にとちつくべし。それより標の通り裾を三つ折りになしおき、各縫ひ目に待針を打ち、三四分の針目にて衿へ行くとす。

6 衿附 先づ衿の山標と脊縫とを合せて待針をなし、又衿肩廻し、劔先、衿先等を合せて待針をなし、衿の方を見て下前よりつけ始め、劔先一二寸の間は一針抜き又は返し針に、衿肩廻しは一針返して小針に縫ひ、脊の縫ひ目に至らば亦返し針をなして、更に上前に待針を打ち、下前の時の如くしてつけ行くべし。留は始め終りともに抄ひ留をなして一二寸返しおき、衿の方に折り返すべし。

それより衿幅をはかりて衿先を縫ひ、三つ衿を衿附の縫代にあはせて重ね縫ひをなし、前身頃の縫ひ込みを少しくのばして三つ衿の両端を合せ、平に下におきて引きつれぬやう左右を綴ちつけ、後、子供物の時の如くして紵けつくべし。

又裏衿をつくるもの、即ちひろえりは、先づ表衿の山標と脊縫

の表とを合せ、次ぎに裏衿を向ふにしてまた山を合せて待針をなし、紵け衿の時の如くして下前よりつけ行き、始め終りに抄ひ留をなし、衿先を縫ひて裏の方に折り、縫ひ込みを綴ちつけ、三つ衿を入れ、幅をはかりて先づ表衿を折り、次ぎに二分つめて裏衿の幅を折り、衿先は圖の如く褙の形に裏を拵へ、縫ひ込み及び三つ衿ぎれは凡べて表衿の方に包み、稍裏の幅を張り目にして表衿に合せ、衿のねぢれぬやう注意してあらく躰をなしおき、後裏衿の方を見て紵け行くべし。



注意 地質剛き品若しくは衿ごしして着するには、脊縫代を三分より稍多くすべし。而して脊線より衿肩明の三分一程の間は左右とも真直にし、其の他は自然に縫代を浅くして、衿肩廻しに至らば子供物の如く一分とすべし。

7 袖附 袖幅並に肩幅に標の通り折りをつけ、左右の袖を間違はぬやう注意して山標を合せ、待針をなし、袖の方を見て附け行き、始め終りは能く抄ひ留をなして袖の方に折りを返し、のち、袖八つ及び身八つを耳紵すべし。

夫より能く縞目を合せて掛け衿をかくべし、其の仕方は、紵け衿ならば先づ幅を二寸五六分程に、廣衿ならば二寸九分程に折り、折り込み深き方を衿附の方にあて、掛け衿のつれぬやうにして下の衿附に合せ、脊衿肩明等に待針をなし、子供物の時の如くにして掛け行くべし。

本裁單衣疊み方の圖



右終らば、常の如く仕上げをなして疊み、暫時壓をおくべし。

【設問】

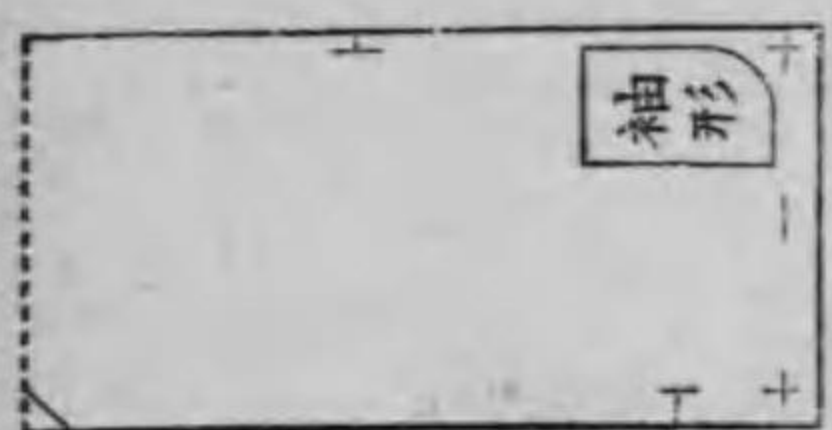
本裁單衣女物の普通仕立上げ寸法を問ふ。
 十四五歳の女子の袖丈、袖口明及び袖附は、凡そ何寸位を適當とするか。
 常着に適する單衣の地質を述べよ。
 本裁單衣女物の縫ひ方順序を述べよ。

第十六章 本裁男單衣

第一 部分縫

一 袖の縫ひ方

標附け方 二尺五寸の運針用布一枚を取り、表を中にして横に二つに折り、圖に示せる順序により、山丈口明人形幅の標を附け、次ぎに袖形を袂のところにあて、丸みの標をつくべし。



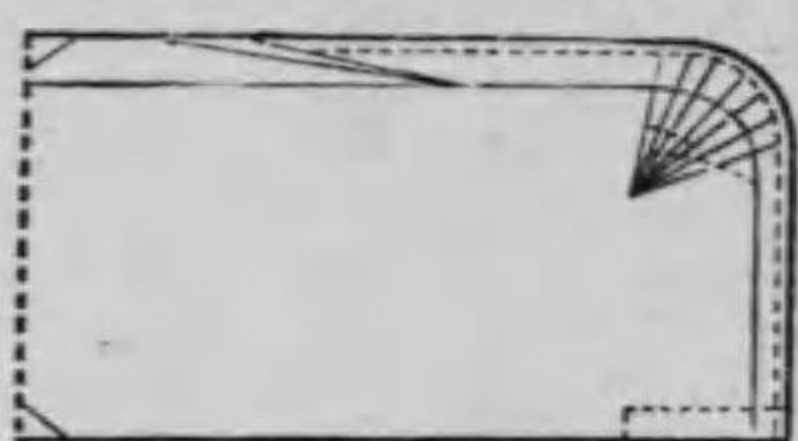
縫ひ方 表を出し、一分の縫代にて兩端七八分を残して袖下を縫ひ、引き返して裏を出し、右袖は袖下の方より、左袖は袖口の方より縫ひ始め、丸みのところに至らば、一針返してこれより小針に縫ひ、丸みの間は稍、絲を縮め置く程に軽く絲扱きをなし、終りも亦一針返して

これより普通の針目にて縫ひ行き、袖口元は抄ひ留に、人形は返し留にすべし。

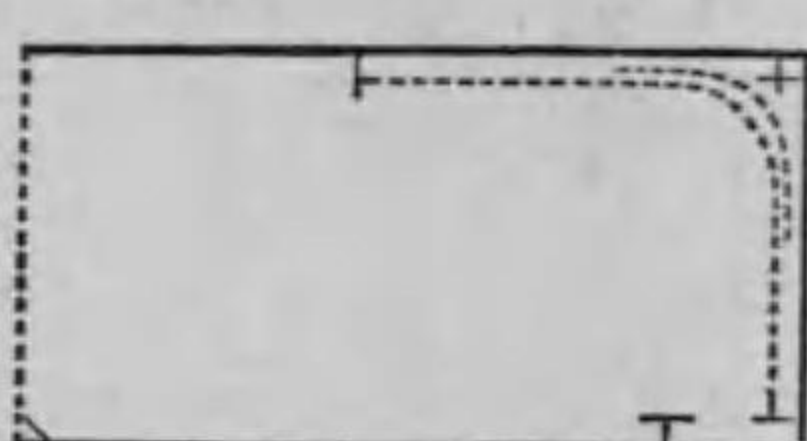
次ぎに丸みの一分程手前より縫代の方へ、兩端一分五厘、中央二分程離して第一圖の如く小針に縫ひ、五厘の着せにて折りをつけ、丸みの始めと終りとに待針をなし、今縫ひたる絲を引きて弛みを縮め、第二圖の如く襷を綺麗に整へ、前に縫ひたるところより尙ほ一分五厘離して針を通し、襷を纏め、次ぎに縫ひ込みの端に絲をかけて、襷の動かぬやうに留め置くべし。

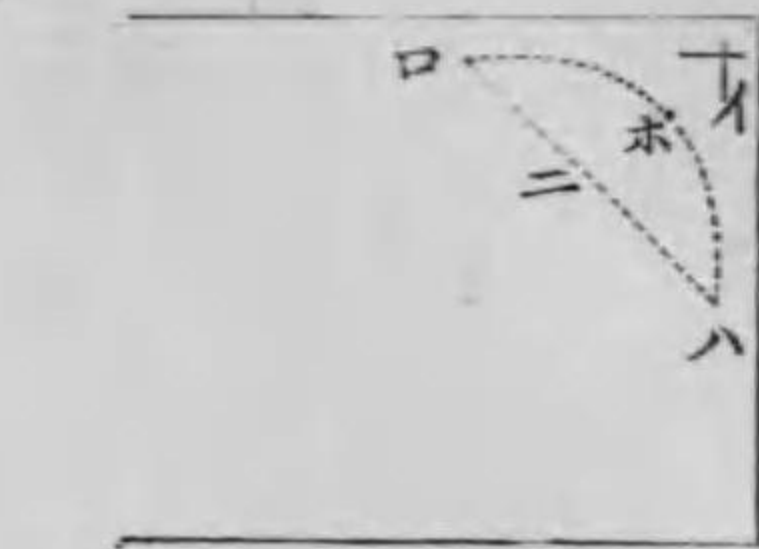
注意 男物の袂丸は、普通は五分なれども、年老いたる人には六七分となすを可とす。此の場合には、袂の方一寸二三分の間袋縫ひをなさぬを宜しとす。

圖二第



圖一第





又袂丸を寸法にて標するには左の割り出しによるべし。先づ定むるところの丸みの寸法だけ、袖下の縫代(イ)より、圖の如く幅へも、丈へもはかりて、(ロ)の標をつけ、此の二點をつなぎて(ニ)線を引き、この線の中央と、(イ)點との間の長さの二分の一弱(ニ)線の方によする(ホ)のところに、(ホ)の標をなし、此の點を通して丸みの標をつくべし。

二 揚の仕方

二尺三寸の運針用布二枚を取り、衿肩明二寸五分を残して二分五厘の縫代にて割り繼ぎをなし、片身頃と看做すべし。
 標付け方 表を中にして衿肩明より二つに折り、後身を上に折り目を左に脊を手前にして下に置き、第一圖の如く、山丈袖附後幅肩幅の標をつけ、次に第二圖の如く衿肩を五分後身頃の方へ

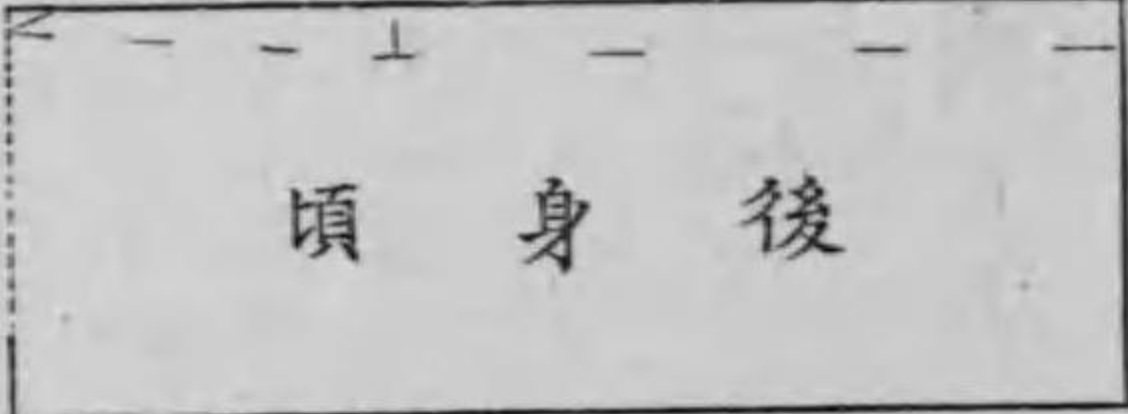
越して揚の標をつくべし。その仕方は、

肩の折り目より圖に示せる寸法通りはかりて、(イ)の標を附し、次に揚の寸法だけばかりて、(ロ)の標をなすべし。

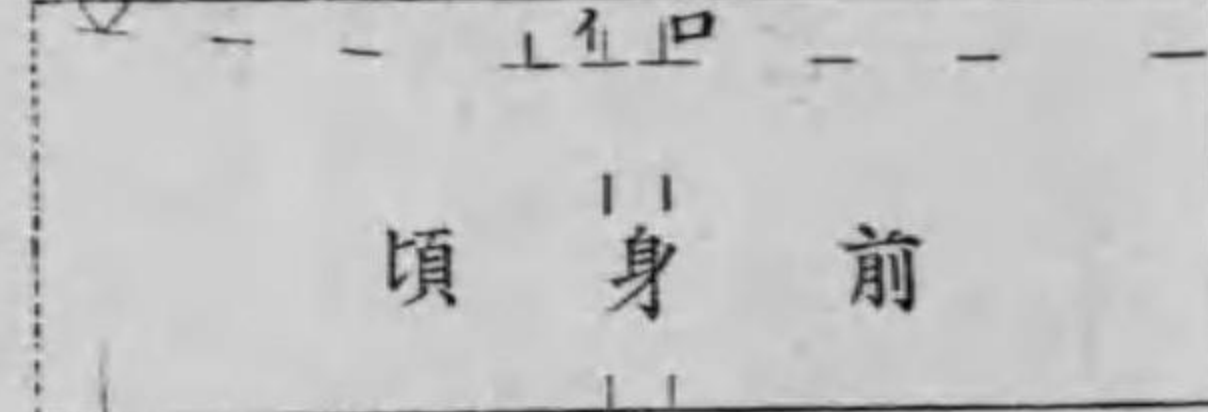
縫ひ方 後身頃の揚の(イ)の標を合せて待針をなし、幅標の一分先きまで縫ひ、次に前身の揚を布幅だけ縫ひ、何れも

裾口の方へ折り返して隠し躰をなし、次に脇を縫ひ、後幅の縫ひ込みを揚のところまで開きて、割り躰をなすべし。

第一圖 後身頃



第二圖 前身頃



三 袖の付け方

袖身頃共に標の通り折りをつけ、山標を合せて待針をなし、袖

の方を稍弛めになして協明と合せ袖下のところは袖にて身頃を包み、人形の縫ひ終りより針を出し、袖身頃(一枚)袖といふ順に針を出し、次ぎに小さく袖二枚のみに通して返し、四つ留をなし、此の糸にて直ちに袖をつけ、肩幅に縫ひ込みあるものは、幅標の二分程先きを折りてつく縫ひ終りは返し針をなすべし。

【設問】

六分の袂丸の標附け方を述べよ。

男物單衣腰揚の仕方を問ふ。

袖附元の四つ留の順序を述べよ。

第二 本裁男單衣裁ち方・積り方

裁ち方につき心得べき事柄は、第十五章第一本裁女單衣の時に同じ。

一 棒衤裁ち方

用布 並幅長さ二丈八尺

普通裁ち切り寸法

袖丈 一尺四寸五分 身丈 三尺八寸五分 衤肩明 二寸五分

衤下り 四寸五分 衤幅 四寸八分 衤丈 四尺六寸

二 鈎衤裁ち方

用布 並幅長さ二丈七尺

普通裁ち切り寸法

袖丈 一尺四寸五分 身丈 三尺八寸五分 衤肩明 二寸五分

衤下り 四寸 衤下 二尺三寸五分 衤幅 四寸八分

鉤の切り込み 七分 衿丈 四尺八寸

右裁ち方の圖、折り方の圖、及び積り方の算法等は、すべて第十
五章本裁女單衣に同じ。

【設問】

並幅の布にて男物を裁つに袖丈一尺四寸、身丈三尺七寸として棒衿とせば
用布何程となるか。

並幅二丈七尺五寸を以て男物を裁たんとするに、袖丈一尺四寸五分、鉤下二
尺五寸とせば身丈何程となるか。

第三 本裁男單衣仕立方

一 普通仕立上げ寸法

袖丈	一尺四寸五分	袖口明	七寸五分	袖附	一尺二寸
人形	二寸	袖幅	八寸五分	身丈	三尺六寸五分

衿肩明	二寸三分	後幅	八寸	肩幅	八寸七分
衿下り	五寸五分	前幅	六寸五分 乃至七寸	抱幅	六寸乃至 六寸二分
衿下	一尺七寸五分	衿幅	四寸	合襖幅	三寸六分
衿幅	一寸五分乃至 一寸六分	衿	一尺七寸五分		

注意 衿幅は頸短き人は狭く、長き人は廣くするを可とす。

二 標附け方

一 袖	二 後身頃	三 揚
四 前身頃	五 衿	六 衿

1 袖 表を中にして真中より二つに折り、左右の袖を重ね、正
しく揃へて下に置き、寸法通り山・丈・口明・人形幅及び丸みの標を
つくべし。

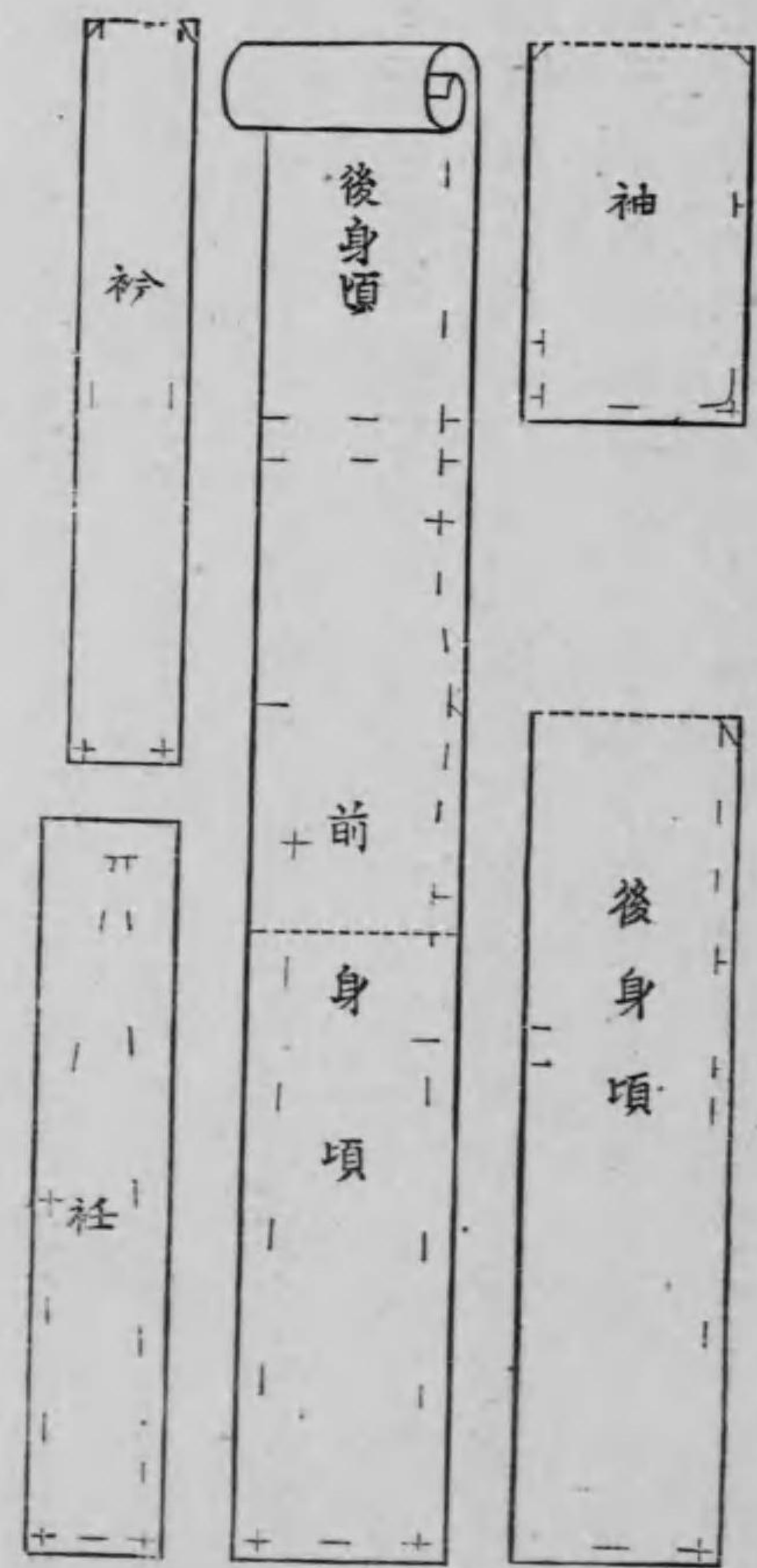
2 身頃 表を中にして二枚合せ、衿肩明より二つに折り、後身

を上にして四枚揃へ、部分縫の通り山丈袖附後幅肩幅の標を附け、次に衿肩を五分後身頃の方に越して揚の標をなす。但し袖附の寸法は袖より身頃の方を一分つめ置き、又揚の高さは普通の丈にありては、後身は肩山より一尺三寸、前身は一尺四寸とす。それより後身頃を左に開き、前身頃を出して揚の標を合せて折り、此の處に待針をなして、衿下り前幅抱幅及び其の中間に標を附くべし。

注意 揚の寸法を定むるには、仕立上げの身丈と、上下の縫代八分と、揚の着せ及び縫ひ縮みの分一分若しくは二分とを加へて、裁ち切りの身丈より減じ、残り
を揚となすべし。
身丈高き人は、揚の高さを肩山より一尺三寸五分下ぐるを可とす。

3 衿 表を中にして左右の衿を揃へて下におき、女物單衣の通り、丈衿下幅合襷幅衿附衿附の標をつくべし。

4 衿 表裏共に、表を中にして各中央より二つに折り、裏衿を下に表衿を上にして四枚重ね、山丈縫代幅の標をつくべし。



三 縫ひ方順序

- 一 袖
- 二 脊縫
- 三 肩當

- 四 揚
- 五 居敷當
- 六 脇縫
- 七 衿附
- 八 裾衿
- 九 衿附
- 一〇 袖附

1 袖 部分縫の通り表を外にして袖下を縫ひ、次に裏を出して、左袖は袖口より、右袖は人形より縫ひ始め、袖口を抄ひ留に、人形を返し留にして手前の方に折りをつけ、袂の丸みを拵へ、袖口明を三つ折り衿になすべし。

2 身頃及び衿 衿肩明をかゝり、肩當居敷當の裁ち目を伏せ、衿下を三つ折り衿になし置き、女物の通りに脊を縫ひ、肩當をつけ、後前の揚をなし、居敷當をつけ、兩脇を縫ひて、上を抄ひ留に、下を返し針になし、前身の方に折りをつけ、後の縫ひ込みを開きて揚のところまで割り躰をなし、縫ひ込みを綴ちつけ、次に標

を合せて衿をつけ、又縫ひ込みを綴ちつけ、裾掛をなすべし。

3 衿附 衿の表裏にて身頃を挟み、劍先は一針抜き又は返し針をなして三枚共に縫ひ行き、始め終りは抄ひ留をなし、衿先を縫ひ、裏の方に返して縫ひ込みを綴ちつけ、引き返して表を出し、幅を極め、折りをつけ、折り込みの端を三角に折りて、針目の表に出でぬ様に二三針縫ひつけ、次に衿幅を二つに折りて、山衿肩明及び他の處々にも待針をなし、女物の時の如く衿け上ぐべし。但し衿け始め及び終りの留は、衿先より二分、衿附の縫ひ目より一分五厘程離れたるところに、表裏共に小さき針目を出して、かく留め置くべし。

4 袖附 部分縫の通り袖と身頃とを合せて袖下に四つ留をなし、肩幅廣きものは、身頃を折りてつけ、袖の方に返し、のち、身頃

の縫ひ込みを耳紵にすべし。

右終らば、能く縞目を合せて掛け衿をかくべし、但し幅の縫ひ込みは女物と同じく、すべて表の方になし、裏へは一寸程返し置くべし。又掛け衿の下は少しく衿を狭く紵け上ぐるを可とす。それより霧を吹きて仕上げをなして畳み、暫時壓をおくべし。

【設問】

本裁男物の普通仕立上げ寸法を問ふ。
単衣の縫ひ方に於て男物と女物との異なる所を述べよ。

卷一終

大正八年十月廿二日印刷
大正八年十月廿五日發行
大正十年五月七日修正印刷
大正十年五月十日再版發行

實科裁縫教科書 壹卷

定價金六拾六錢

著者 今村 順子

東京市日本橋區通三丁目十番地

河出 靜一郎

〔電話本局二七七七番〕

東京市京橋區南傳馬町二丁目五番地

目黒 甚七

〔電話京橋二一六三番〕

東京市神田區錦町三丁目一番地

神田 印刷所

不許複製



發行者

印刷所

發行所

東京市日本橋區通三丁目
〔振替口座東京一七一九番〕
東京市京橋區南傳馬町二丁目
〔振替口座東京二八〇九番〕

成美堂書店
目黒書店

11
4
453

11
453



終

